

地域連携型高校生向け自転車交通安全教育推進事業

高校生向け自転車安全運転講習

実施資料（指導マニュアル・実践好事例集）

2020年12月

一般社団法人 日本自動車工業会

一般財団法人 日本交通安全教育普及協会

本資料の活用について

通学などに自転車を利用することが多い高校生は、被害者として事故に巻き込まれるだけでなく、加害者として事故を引き起こしてしまうリスクもあります。近年、自転車利用に関するルールの周知の必要性が叫ばれ、高等学校においても実効性のある自転車安全教育の推進が強く求められています。しかし、多忙な業務の中、交通安全に関する指導等に十分な時間を確保できていないというのが学校現場の現状でもあります。

(一財)日本交通安全教育普及協会と(一社)日本自動車工業会が取り組む「地域連携型高校生向け自転車交通安全教育推進事業」は、学校だけでは十分な交通安全教育を施すことが難しいという現実を踏まえ、地域の交通安全教育センターとしての役割を併せ持つ自動車教習所の指導員に、高校生に対する安全教育を担ってもらおうとの趣旨で始まりました。(一財)日本交通安全教育普及協会が仲介役となり、地域の自動車教習所と高等学校が連携し、高校生の自転車安全教育を効果的に推進していくことを目指しています。

同事業ではまず、2016年度から2018年度の3年間、自転車保険の義務化などを盛り込んだ条例をいち早く制定するなど、自転車の安全対策に先進的に取り組む兵庫県で実施しました。兵庫県教育委員会の指導のもと、事業を実施するモデル校を選定。①生徒が「主体的、協働的」に学習できる教育手法を取り入れた教育プログラムの構築(教育コンテンツづくり)②自動車教習所の指導員が効果的な教育手法等を習得するための研修プログラムの策定(指導者づくり)③地域連携型の交通安全教育を推進するための関係組織間の連携の在り方などの検討(体制づくり)の3つをテーマにモデル事業を重ねてきました。

また、2019年度は、前年度まで兵庫県で実施してきた内容を他県でも展開可能かを検証するため、山形県で実施しました。山形県教育委員会と連携し、県内全域でモデル事業を実施するだけでなく、本事業を県内へ迅速に展開・定着させることをねらいとして、近隣の自治体・警察署・高等学校・自動車教習所の視察を募るとともに、教育委員会が主催する高等学校教職員対象の研修会で、本事業の紹介と内容の実演を行い、高等学校への周知を図りました。

本資料は、この4年間の取り組みの成果を取りまとめたものです。前半部は、実際の自転車安全教育に活用できる指導資料となっており、効果的な安全教育手法としての「アクティブ・ラーニング手法」について解説しているほか、自転車安全運転講習会の基本的なカリキュラム例やグループ・ディスカッションの展開案、体験学習の展開案など、具体的なコンテンツ例を豊富に収録しています。

後半部は、実際に兵庫県・山形県で展開した講習会の事例を紹介しています。座学のみでの実施事例や、事故再現見学などの体験学習を含む総合的な実施事例など、さまざまな参加人数・実施時間・会場などの、多種多様なケースに応じた事例が収録されています。

本資料は、実際に自転車安全運転講習会を開催しようとする際に、すぐに役立つ実践的な手引きとなっています。今後、他都道府県においても、教育委員会ご指導のもと、各学校及び地域の自動車教習所が連携しながら、本資料を十分ご活用いただき、交通事故防止にお役立ていただければ幸いです。

もくじ

1. はじめに	P5
2. 高校生に対する自転車安全教育における自動車教習所との連携	P5
3. 受動的から能動的交通安全教育への変革	P6
4. アクティブ・ラーニング手法を取り入れた交通安全教育	P6
5. 高等学校における自転車安全教育手法	P7
6. 自転車安全運転講習会の基本的カリキュラム例	P8
7. グループ・ディスカッションの基本展開案	P9
自転車交通場面観察	P9
危険予測学習	P11
事故事例・ヒヤリハット学習	P13
8. ディスカッション用ワークシート項目	P15
自転車交通場面観察	P15
危険予測学習	P16
事故事例・ヒヤリハット学習	P17
9. その他のディスカッション手法	P18
シンク・ペア・シェア (Think Pair Share) 法	P18
ジグソー (Jigsaw) 法	P20
10. 体験学習に関する展開案	P22
一時停止標識のある交差点での事故再現	P22
信号機のある交差点での事故再現	P24
駐停車車両の側方通行での事故再現	P26
ヘッドフォン等使用運転の危険性についての実験	P28
11. 自転車ルール学習における理解度チェック	P30

12. グループ・ディスカッションの実践事例	P31
●事例1：新1年生（全員）を対象としたグループ・ディスカッション例		P31
兵庫県立有馬高等学校新1年生（240名：40名×6クラス）		
●事例2：新1年生（全員）を対象としたグループ・ディスカッション例		P35
三重県立亀山高等学校新1年生（280名：35名×8クラス）		
13. 様々な実践好事例	P39
●事例1：全校生徒（824名）を対象とした100分での展開事例		P39
兵庫県立西脇高等学校 全校生徒（824名：7クラス×3学年）		
●事例2：定時制の生徒を対象に、教習所で講習を実施		P41
兵庫県立赤穂高等学校定時制 全校生徒（50名：5クラス＝1～4学年）		
●事例3：田園部と住宅街が隣接する環境における指導		P43
兵庫県立多可高等学校 全校生徒281名（3クラス×3学年）		
●事例4：自転車通学8割の高校で、1単元のグループ・ディスカッションを実施		P45
兵庫県立夢前高等学校 全校生徒341名（3クラス×3学年）		
●事例5：3種類の体験学習を分刻みでローテーション		P47
兵庫県立川西明峰高等学校 1年生約300名（50名×6グループで展開）		
●事例6：下校時の生徒の様子を撮影した動画を教材として活用		P50
兵庫県立宝塚東高等学校 全校生徒約900名（23クラス）		
●事例7：室内実験を工夫し、体育館で効果的な体験学習を実施		P52
兵庫県立東播磨高等学校 全校生徒約850名		
●事例8：特別支援学校の生徒たちに、シンプルで分かりやすい講習		P54
兵庫県立阪神昆陽（こや）特別支援学校 全校生徒約140名		
●事例9：高校2、3年生が「島のすべての下級生」を交通安全指導		P56
兵庫県立家島高等学校 幼稚園（全員8名）／小学校（全員74名）		
中学校（全員37名）／高校（全員81名）		
●事例10：イヤホン実験などの体験学習が生徒たちに強い印象		P58
山形県立長井工業高等学校 全校生徒約260名		
●事例11：法規学習で加害責任の重さなど学ぶ		P60
山形県立鶴岡中央高等学校 377名（1年生174名、2年生203名）		
●事例12：映像から普段の自分の行動を振り返ったグループ・ディスカッション		P62
山形県立酒田光陵高等学校 ①全学年997名（約40名×8クラス×3学年）		
②1年生312名（約40名×8クラス）		
●事例13：自転車安全利用五則を初めて知る生徒も		P64
山形県立新庄神室産業高等学校 1年生113名（30名×4クラス）		
●事例14：法規学習とグループ・ディスカッションで交通ルール的重要性を認識		P66
山形県立上山明新館高等学校 全校生徒約770名		

1. はじめに

通学などの移動に自転車を利用することが多い高校生は、交通事故に遭う可能性も高くなる。その場合、被害者としてばかりでなく、加害者として事故を起こし、高額な賠償を請求されるケースも発生している。また、近年では自転車による事故が社会問題化しているため、良好な自転車交通秩序の実現のための総合対策として、自転車に関するルールの周知と安全教育の推進が図られ、学校現場においても、実効性のある自転車安全教育の推進が強く求められている。

しかし、学校現場の現状を見ると、通常の授業に加えて学習指導、生活指導、進路指導など様々な業務が追加され、「交通安全」に関する指導や準備にかかる時間が十分に確保できなくなっており、学校だけで十分な交通安全教育を担うことが難しい状況にある。

本資料は、地域の交通安全センターとしての役割を担う自動車教習所の指導員に対して、高校生に対する効果的な自転車安全教育の手法と知識を習得してもらうことで、高等学校の自転車安全教育に寄与することを目的としている。

2. 高校生に対する自転車安全教育における

自動車教習所との連携

高校生に対する自転車安全教育については、多くの高校で実施されているが、警察署員または学校教職員自らによる講話型がほとんどで、指導者から学習者への一方通行的な学習方法になっているのが現実である。また、14歳以上を受講対象者とする改正道交法の自転車運転者講習制度が施行になるなど、高校生であっても自転車を運転する際においては、自転車のルールを知らなかったでは済まされない状況となっている。

高等学校生徒指導担当教員へ自動車教習所との連携指導について尋ねると、検討したいとする声が4割を超え、その理由は「交通の専門家からの指導」「体験学習ができる」「学校教職員の知識・準備に限界がある」からとなっている。しかし、その反面、連携に踏み切れない理由として「営利目的が先行しそう」、「正しい自転車の知識を有しているのか心配」、「高校生世代に対する指導方法に不安がある」、「生徒数が多く連携しづらい」などの課題も浮き彫りになっている。

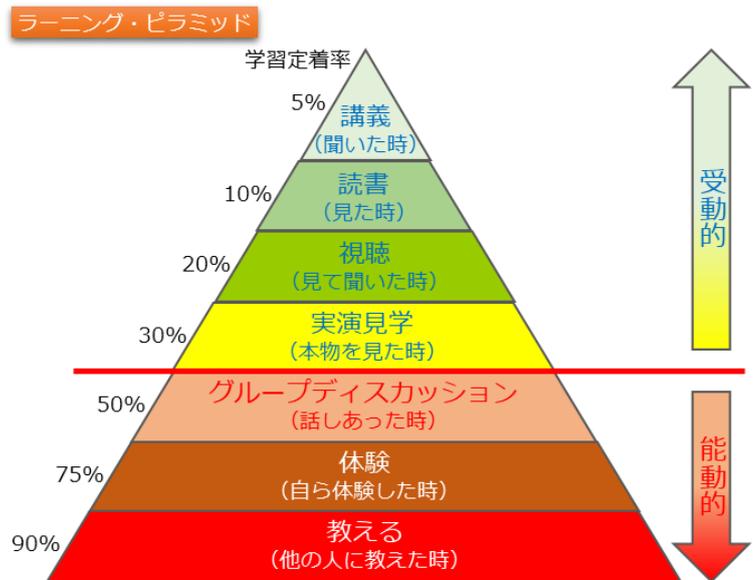
今後、高等学校と自動車教習所が連携して行くためには、自動車教習所指導員の指導力をあげるとともに、高等学校との連携の在り方を理解し、実践できる資質向上が必要となる。

3. 受動的から能動的交通安全教育への変革

これまで実施されてきた交通安全教育を見てみると、講話などの一方通行の講義型やビデオ視聴が多く、自ら考え、共通課題を話し合う等の教育手法を取り入れている場面は少ない。

アメリカ国立訓練研究所による学習定着率の調査から考案されたラーニング・ピラミッドでは、講義等の傾聴型教育の学習定着率は 5%程度とされ、スケアードストレート等に代表される実験見学型の教育でも 30%程度となっている。

こうした教育手法は高校生たち学習者にとっては「受動的」学習となり、時間の経過とともに忘れ去られてしまう可能性が大きい。それに比べて、能動的学習といわれる事象事例研究等のグループ・ディスカッションは 50%、実技体験型学習は 75%、さらに他人に教えるに至っては、学習定着率も 90%と高く、交通安全教育手法においても、これらを活用して実施していくことが重要と考えられる。



4. アクティブ・ラーニング手法を取り入れた交通安全教育

2014年11月に発表された「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」では、教育目標・方法・学習評価を捉える新しい時代にふさわしい学習指導要領の基本的な考え方として、「課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の充実～略～」とあり、当該指導要領の理念を実現させる手法として「アクティブ・ラーニングなどの新たな学習・指導方法や、新しい学びに対応した評価方法等の開発・普及」とある。

そもそもアクティブ・ラーニングとは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」（文部科学省用語集）とある。また、最も実践的な定義の代表として「一方的な知識伝達型講義を聴くという（受

動的) 学習を乗り越える意味でのあらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」(溝上慎一, 2014) がある。

交通安全教育では、交通安全に関する課題について、グループ・ディスカッションやグループ・ワークなど、生徒自身が主体的・協働的に「学習(体験)」することで、自らの行動を「振り返り」、安全な行動について新たな「気づき」を得て、安全行動の実践化につなげていくことができる。

◆ 基本的なグループ・ディスカッションの流れ

- ① 導 入 (5 分) : 課題の設定や目的・目標・議論のルール説明を行う。
- ② 個 人 学 習 (5 分) : 課題に対して、周りに相談せずに自分で考える。
- ③ グループ学習 (20 分) : 個人で考えた意見をグループで話し合いまとめる。
- ④ 全 体 発 表 (15 分) : 他のグループの様々な意見を共有し、理解を深める。
- ⑤ 振 り 返 り (5 分) : 個人・グループ学習や全体発表を通じて、気づきを得ることで、今後の行動計画を設計する。

5. 高等学校における自転車安全教育手法

【座学】

アクティブ・ラーニング手法を用いて、グループ・ディスカッションやグループ・ワークで展開

1. 自転車交通場面観察
2. 事故事例研究
3. 危険予測学習

【実技】

教習所コースや校庭において、実際の自転車、車両を用いて展開

1. 一時停止標識のある交差点での事故再現と正しい走行の方法
2. 信号機のある交差点での事故再現と正しい走行の方法
3. 駐停車車両の側方通行での事故再現と正しい走行の方法
4. ヘッドフォン使用時の危険性についての実験

6. 自転車安全運転講習会の基本的カリキュラム例

ここでは約1学年を対象とした1日をかけてカリキュラム例を例示する。実際に実施する場合、時間や会場において様々な制限が発生するため、「グループ・ディスカッション+交通法規学習」、「グループ・ディスカッション+危険実験」などといったように、グループ・ディスカッションを中心に各カリキュラムを効率よく組み合わせて実施することが必要である。

◆160名(1組40名、4クラス)対象にした場合のカリキュラム例

時間	1班(40名)	2班(40名)	3班(40名)	4班(40名)
8:30	参加者集合・開会			
8:40~8:50	自転車点検			
9:00~9:50	交通ルール学習		体験学習 A・B	体験学習 B・A
10:00~10:50	グループ・ディスカッション		体験学習 C・D	体験学習 D・C
11:00~11:50	体験学習 A・B	体験学習 B・A	基本走行など	
11:50~12:50	昼休み			
12:50~13:40	体験学習 C・D	体験学習 D・C	交通ルール学習	
13:50~14:40	基本走行など		グループ・ディスカッション	
14:50~	自転車運転免許証等の授与・閉会			

●各カリキュラム内容例

カリキュラム項目	内容
自転車点検	自転車の点検要領
交通ルール学習	自転車に関する交通ルール学習
グループ・ディスカッション	個人学習後、グループで討議し、発表
体験学習 A	一時停止のある見通しの悪い交差点での事故再現
体験学習 B	信号のある交差点における右直事故を再現
体験学習 C	駐停車車両の側方通過における事故再現
体験学習 D	ヘッドフォン使用時の危険性についての実験
基本走行	交通法規に従った自転車運転の実技

7. グループ・ディスカッションの基本展開案

1. 自転車交通場面観察：50分・生徒40名・教室

テーマ	自転車交通画面の観察
ねらい	① 他者の行動から自身の普段の行動を振り返り、自分自身の運転を評価する。 ② 交通ルールを守ることや安全行動の重要性に気づかせ、安全で正しい自転車の運転が実践できるようにする。
役割・準備物	進行役1名・補助1～2名 ビデオ視聴機材・ワークシート ※ビデオは既存の物、または通学路における危険箇所の定点観測ビデオなど

※同様の手法で「事件事例研究」「危険予測学習」を実施可能。

【事前準備】

生徒を4～6名のグループに分け、司会・書記・発表者を決める。また、話しやすいように向かい合わせに座るなどの席移動を行う。

【導入・説明：(5分)】

1. アイスブレイク
2. 学習のねらいや手順を具体的にわかりやすく説明する。
 - ① これから視聴する映像の交通場面について、身近にある同じような場所をあげて自分自身の自転車の乗り方と重ね合わせて見るように呼びかける。
 - ② 映像全体を注意深く見て、周囲の状況をよく観察するように促す。

【個人学習(10分)】

1. 同世代の自転車交通場面を視聴し、交通事故に遭わないようにするためにはどのように行動すべきかを考える。
 - Q 映像に映っているもの交通状況を具体的にあげる。
 - Q 映像の場面において、どのような交通ルール違反があったか？また、そのルール違反によってどのような交通事故が起こるか考えてもらう。
2. 普段の自分の行動を評価する（何ができていて、何ができていないのか）。
 - Q 映像と普段の自分の行動を比べて、どのようなことを感じたか？
※自分の行動を点数化（5・10・100点満点など）

【グループ・ディスカッション（20分）】

1. 個人学習で個々に考えた内容を発表し合う（自分と他人の意見の違いに注目）。
2. グループ内で出し合った意見をまとめ、それら一つ一つについて、「なぜ?」「どうして、そうなるか?」をもう一度深く掘り下げて、「根本的原因（理由）」を話し合い、まとめる。

Q なぜ、ルール違反をしてしまうのか?（ルール違反と知っているが、違反してしまう理由とは?）

Q どうすればルールを守り、安全に行動することができるようになるか?

Ex.急いでいた→（なぜ?）遅刻しそう→（どうして?）寝坊してしまい→（なぜ?）夜更かしをしてしまい→（どうして?）深夜番組を見ていて→（根本的な理由は）寝坊することが予測できていたのに、好きな（楽しい）番組を見ることを我慢できなかったこと

【振り返り（15分）】

1. 各補助者が担当するグループ（10グループ程度・50名程度）から2グループが代表して、まとめた意見を発表させ、さまざまな意見を共有することで考え方を深めさせる。
 - ※ 発表8グループ（1グループ1~2分程度）
 - ※ 自分たちの意見との違いに注目させる。
2. 他の意見を聞き、もう一度個人で、「交通事故に遭わないためにはどのように行動すべきか」を考え、ワークシートに記入してもらう。
 - ※ 参考：ラウンド・ロビン（Round robin）法

2. 危険予測学習：50分・生徒40名・教室

テーマ	危険予測学習
ねらい	① 映像をもとに、どのような危険が予測できるかを自ら考えさせ、危険を避けるための行動について、グループで話し合わせることにより、危険予測能力と危険回避能力を身につけさせる。 ② 交通ルールを守ることや安全行動の重要性に気づかせ、安全で正しい自転車の運転が実践できるようにする。
役割・準備物	進行役1名・補助1～2名 ビデオ視聴機材・ワークシート ※ビデオは既存の物、または通学路における危険箇所の定点観測ビデオなど

【事前準備】

生徒を4～6名のグループに分け、司会・書記・発表者を決める。また、話しやすいように向かい合わせに座るなどの席移動を行う。

【導入・説明：(5分)】

1. アイスブレイク
2. 学習のねらいや手順を具体的にわかりやすく説明する。
 - ① これから視聴する映像の交通場面について、身近にある同じような場所をあげて自分自身の自転車の乗り方と重ね合わせて見るように呼びかける。
 - ② 映像全体を注意深く見て、周囲の状況をよく観察するように促す。

【個人学習(10分)】

1. 映像の場面を見て、各自で下記Qについて考えさせる。
 - Q 映像の場面において、どのような危険が予測されるか？
Ex.道路幅、周囲の建物の状況、歩行者や車両などの交通他者の状況など
 - Q 映像と同じ状況で、普段どのようなことに気をつけているか？
Ex.過去のヒヤリハット体験など
2. 普段の自分の行動を評価する（何ができていて、何ができていないのか）。
 - Q 映像と普段の自分の行動を比べて、どのようなことを感じたか？
※自分の行動を点数化（5・10・100点満点など）
 - Q どうすればルールを守り、安全に行動することができるか？

【グループ・ディスカッション（20分）】

1. 個人学習で個々に考えた内容を発表し合う（自分と他人の意見の違いに注目）。
2. グループ内で出し合った意見をまとめ、それら一つ一つについて、「なぜ?」「どうして、そうなるか?」をもう一度深く掘り下げて、「根本的原因（理由）」を話し合い、まとめる。

Q 映像を見て感じたこと、気づいたことは、どのようなことか?

Ex.自分が普段から気をつけている点、普段は見落としている点、他者の行動を見て危険だと思った点など

Q 映像のような状況で事故に遭わないためにはどうすればよいか?

Ex.自転車の速度、走行する場所、その交通場面における交通ルール、交通他者から見てどう感じるかなど

【振り返り（15分）】

1. 各補助者が担当するグループ（10グループ程度・50名程度）から2グループが代表して、まとめた意見を発表させ、さまざまな意見を共有することで考え方を深めさせる。
 - ※ 発表8グループ（1グループ1～2分程度）
 - ※ 自分たちの意見との違いに注目させる。
2. 他の意見を聞き、もう一度個人で、「交通事故に遭わないためにはどのように行動するべきか」を考え、ワークシートに記入してもらう。

3. 事件事例・ヒヤリハット学習：50分・生徒40名・教室

テーマ	事件事例・ヒヤリハット学習
ねらい	① 映像や事件事例をもとに事故原因や自動車運転者などの心理といった交通他者からの視点について考えさせ、グループで話し合わせることで、危険予測能力と危険回避能力を身につけさせる。 ② 交通ルールを守ることや安全行動の重要性に気づかせ、安全で正しい自転車の運転が実践できるようにする。
役割・準備物	進行役1名・補助1～2名 ビデオ視聴機材・ワークシート ※ ビデオは既存の物（ドライブレコーダー映像など）、または事故をもとにした俯瞰図など

【事前準備】

生徒を4～6名のグループに分け、司会・書記・発表者を決める。また、話しやすいように向かい合わせに座るなどの席移動を行う。

ドライブレコーダー映像（実際の交通事故映像）を使用する場合は、予めショッキングな内容であることを伝え、注意喚起する。

【導入・説明：（5分）】

1. アイスブレイク
2. 学習のねらいや手順を具体的にわかりやすく説明する。
 - ① これから視聴する映像について、どうして事故やヒヤリハットが発生してしまったのか、原因について考え、また、日頃の自分たちの自転車の乗り方が自動車運転者など交通他者の立場からどのように見られているか、想像しながら視聴するように呼びかける。
 - ② 映像全体を注意深く見て、周囲の状況をよく観察するように促す。

【個人学習（10分）】

1. 映像の場面を見て、各自で下記Qについて考えさせる。
 - Q 映像の場面（事件事例）において、どのような危険が予測されるか？
Ex.加害者側に関係する原因、被害者側に関係する原因、道路環境や気象状況など。
 - Q 映像と同じ状況で、交通他者の立場だったら、どのようなことを感じるか？
Ex.自転車の動きが予測できたか？普段の自分の行動と照らし合わせどう感じたか？など
 - Q このような事故やヒヤリハットを回避するために、どうするか？
Ex.「ルールを守る」等の短絡的解答ではなく、どうすれば実践できるか深く考えさせる。

【グループ・ディスカッション（20分）】

1. 個人学習で個々に考えた内容を発表し合う（自分と他人の意見の違いに注目）。
2. グループ内で出し合った意見をまとめ、それら一つ一つについて、「なぜ？」「どうして、そうなるか？」をもう一度深く掘り下げて、「根本的原因（理由）」を話し合い、まとめる。

Q 映像を見て感じたこと、気づいたことは、どのようなことか？

Ex.自分が普段から気をつけている点、普段は見落としている点、他者の行動を見て危険だと思った点など

Q 映像のような状況で事故に遭わないためにはどうすればよいか？

Ex.自転車の速度、走行する場所、その交通場面における交通ルール、交通他者から見てどう感じるかなど

【振り返り（15分）】

1. 各補助者が担当するグループ（10グループ程度・50名程度）から2グループが代表して、まとめた意見を発表させ、さまざまな意見を共有することで考え方を深めさせる。
 - ※ 発表8グループ（1グループ1～2分程度）
 - ※ 自分たちの意見との違いに注目させる。
2. 他の意見を聞き、もう一度個人で、「交通事故に遭わないためにはどのように行動するべきか」を考え、ワークシートに記入してもらう。

8. ディスカッション用ワークシート項目

1. 自転車交通場面観察

【A：個人学習】

Q 映像に映っているものや交通状況を具体的にあげてください。

Q 映像の中のルール違反をあげてみましょう。また、その違反によってどのような事故が起こるか考えてみましょう。

《違反》

《事故》

Q 映像と普段の自分の行動を比べて、どのようなことを感じましたか？

Q なぜ、ルール違反をしてしまうのでしょうか？（彼らはルールを知らないのでしょうか？それとも、知ってはいるがルール違反をしてしまう理由が、何かあるのでしょうか？）

Q どうすればルールを守り、安全に行動することができるようになるのでしょうか？

【B：グループ・ディスカッション】

Q グループで話し合い、意見をまとめてみましょう。

Q なぜ、ルール違反をしてしまうのでしょうか？

Q どうすればルールを守り、安全に行動することができるようになるのでしょうか？

【C：個人学習・振り返り】

Q 交通事故に遭わないためにはどのように行動したらよいのでしょうか？

2. 危険予測学習

【A：個人学習】

- Q 映像に映っているものや交通状況を具体的にあげてください。
- Q 映像の場面において、どのような危険が予測されますか？
- Q 映像と同じ状況で、あなたは普段どのようなことに気をつけていますか？
- Q 普段の行動を振り返って、気付いたことは何ですか？ 普段の行動を振り返って考えてください。
- Q どうすればルールを守り、安全に行動することができるようになるのでしょうか？

【B：グループ・ディスカッション】

- Q グループで話し合い、意見をまとめてみましょう。
- Q なぜ、ルール違反をしてしまうのでしょうか？

Q どうすればルールを守り、安全に行動することができるようになるのでしょうか？

【C：個人学習・振り返り】

- Q 交通事故に遭わないためにはどのように行動したらよいのでしょうか？

3. 事件事例・ヒヤリハット学習

【A：個人学習】

- Q 映像に映っているものや交通状況を具体的にあげてください。
- Q 映像の場面において、どうして事故やヒヤリハットが発生してしまったのでしょうか？
- Q もし、あなたが自動車運転者（交通他者）の立場だったら、どのようなことを感じますか？
- Q このような事故やヒヤリハットを回避するために、あなたならどうしますか？

【B：グループ・ディスカッション】

- Q グループで話し合い、意見をまとめてみましょう。
- Q なぜ、ルール違反をしてしまうのでしょうか？

Q どうすればルールを守り、安全に行動することができるようになるのでしょうか？

【C：個人学習・振り返り】

- Q 交通事故に遭わないためにはどのように行動したらよいのでしょうか？

9. その他のディスカッション手法

◆ シンク・ペア・シェア（Think Pair Share）法（自転車交通場面観察）：

50分・生徒600名・体育館

テーマ	自転車交通画面の観察
ねらい	① 他者の行動から自身の普段の行動を振り返り、自分自身の運転を評価する。 ② 交通ルールを守ることや安全行動の重要性に気づかせ、安全で正しい自転車の運転が実践できるようにする。
役割・準備物	進行役1名・補助8名 ビデオ視聴機材・ワークシート ※ビデオは既存の物、または通学路における危険箇所の定点観測ビデオなど

※ 生徒600名を2名1組ペアとし、300グループで展開。

【事前準備】

生徒を2名1組のペアに分ける。

【導入・説明：（5分）】

1. アイスブレイク
2. 学習のねらいや手順を具体的にわかりやすく説明する。
 - ① これから視聴する映像の交通場面について、身近にある同じような場所をあげて自分自身の自転車の乗り方と重ね合わせて見るように呼びかける。
 - ② 映像全体を注意深く見て、周囲の状況をよく観察するように促す。

【個人学習（10分）】

1. 同世代の自転車交通場面を視聴し、交通事故に遭わないようにするためにはどのように行動すべきかを考える。
 - Q 映像に映っているものの交通状況を具体的にあげる。
 - Q 映像の場面において、どのような交通ルール違反があったか？
また、そのルール違反によってどのような交通事故が起こるか考えてもらう。
2. 普段の自分の行動を評価する（何ができていて、何ができていないのか）。
 - Q 映像と普段の自分の行動を比べて、どのようなことを感じたか？
※自分の行動を点数化（5・10・100点満点など）

【ペア・ディスカッション（20分）】

1. 個人学習で個々に考えた内容をペアで発表し合う（自分と他人の意見の違いに注目）。
2. ペアで出し合った意見をまとめ、それら一つ一つについて「なぜ?」「どうしてそうなるか?」をもう一度深く掘り下げて、「根本的原因（理由）」を話し合い、まとめる。

Q なぜ、ルール違反をしてしまうのか?（ルール違反と知っているが、違反してしまう理由とは?）

Q どうすればルールを守り、安全に行動することができるようになるか?

Ex.急いでいた→（なぜ?）遅刻しそうで→（どうして?）寝坊してしまい→（なぜ?）夜更かしをしてしまい→（どうして?）深夜番組を見ていて→（根本的な理由は）寝坊することが予測できていたのに、好きな（楽しい）番組を見ることを我慢出できなかったこと

【振り返り（15分）】

1. 各補助者が担当するグループ（40組程度・80名程度）から2グループが代表して、まとめた意見を発表させ、さまざまな意見を共有することで考え方を深めさせる。
 - ※ 発表8組（1組1~2分程度）
 - ※ 自分たちの意見との違いに注目させる。
2. 他の意見を聞き、もう一度個人で、「交通事故に遭わないためにはどのように行動すべきか」を考え、ワークシートに記入してもらう。

◆ ジグソー (Jigsaw) 法 (自転車交通場面観察) : 100 分・生徒 40 名・教室

テーマ	自転車交通画面の観察
ねらい	① 他者の行動から自身の普段の行動を振り返り、自分自身の運転を評価する。 ② 交通ルールを守ることや安全行動の重要性に気づかせ、安全で正しい自転車の運転が実践できるようにする。
役割・準備物	進行役 1 名・補助 1～2 名 ビデオ視聴機材・ワークシート ※ビデオは既存の物、または通学路における危険箇所の定点観測ビデオなど

※ 生徒 40 名を 4～6 名 1 グループとし、10～7 グループで展開。

【導入・説明 : (15 分)】

1. アイスブレイク
2. 生徒を 4～6 名のグループに分け、専門家 (学習内容) を割り当てる。また、話しやすいよう向かい合わせに座るなどの席移動を行う。
Ex.①ルール違反による危険、②なぜ違反するのか、③どうすれば安全に行動できるか など
3. 学習のねらいや手順を具体的にわかりやすく説明する。
 - ① これから視聴する映像の交通場面について、身近にある同じような場所をあげて自分自身の自転車の乗り方と重ね合わせて見るように呼びかける。
 - ② 映像全体を注意深く見て、周囲の状況をよく観察するように促す。

【個人学習 (10 分)】

1. 同世代の自転車交通場面を視聴し、割り当てられた内容について、注意深く観察し解決策等を考える。

【専門家活動 (25 分)】

1. 一度各グループから離れ、割り当てられた学習内容別グループを作り、意見を出し合い、課題について考える (自分の意見との違いに注目する)。
※人数が多い場合には 6～7 名程度を限界にし、細分化する。
2. 個人学習で個々に考えた内容を発表し合う (自分と他人の意見の違いに注目)。
3. 考えた内容を元のグループに戻った際に、他者へわかりやすく説明する方法も考える。

【グループ・ディスカッション（30分）】

1. 元のグループに戻り、専門家活動で考えた意見を発表し合う。
2. グループ内で出し合った意見をまとめ、それら一つ一つについて、「なぜ?」「どうして、そうなるか?」をもう一度深く掘り下げて、「根本的原因（理由）」を話し合い、まとめる。
Ex.急いでいた→（なぜ?）遅刻しそうで→（どうして?）寝坊してしまい→（なぜ?）夜更かしをしてしまい→（どうして?）深夜番組を見ていて→（根本的な理由は）寝坊することが予測できていたのに、好きな（楽しい）番組を見ることを我慢出できなかったこと
3. 普段の自分の行動を評価する（何ができていて、何ができていないのか）。
Q 映像と普段の自分の行動を比べて、どのようなことを感じたか?
※自分の行動を点数化（5・10・100点満点など）

【振り返り（20分）】

1. 各グループでまとめた意見を発表させ、さまざまな意見を共有することで考え方を深めさせる。
※ 発表 10 グループ程度（1 グループ 1~2 分程度）
※ 自分たちの意見との違いに注目させる。
2. 他の意見を聞き、もう一度個人で、「交通事故に遭わないためにはどのように行動すべきか」を考え、ワークシートに記入してもらおう。

10. 体験学習に関する展開案

◆ 体験学習 A : 20 分

テーマ	一時停止標識のある交差点での事故再現
ねらい	<p>自動車対自転車事故の中で最も多いのが、信号機のない交差点で飛び出してきた自転車の衝突である。ここでは、事故再現を通して、自転車の飛び出しの危険性を理解させ、事故に遭わないための正しい走行の仕方を学習することで、安全な交通行動の実践化を図る。</p> <p>① 見通しの悪い交差点や曲がり角での危険に気付かせ、一旦停止し安全確認をすることの重要性を理解させる。</p> <p>② 運転者は、必ずしも全ての交通状況を、確認できているわけではないことに気付かせる。</p>
役割・準備物	<p>指導者 1 人、自動車運転者 1 人、自転車運転者 1 人、合図係 1 人 乗用車 1 台、自転車 1 台（生徒実技用は別途用意）、 自転車に見立てるための大型テレビなどの段ボール箱</p>

【1. 交通場面における危険の予測】

1. 図のように自転車と自動車を配置する。自転車と自動車の運転者には、相手に見えないような状況を設定する。
2. この交通場面からどのような危険が考えられるか、生徒に考えさせ、数名に発表してもらう（運転者の心理状況や行動についても考えるように促す）。

【2. 事故再現①（指導員による事故の再現）】

1. 自動車に数名の生徒を乗車させ、自動車を徐行しながら直進させる。同時に指導員が運転する自転車を飛び出させる。
2. 自動車と自転車が接触するぎりぎりの状況を再現する。
3. 同乗した生徒に自動車からどのように見えたかを発表してもらう。

【3. 事故再現②（自転車に見立てた、段ボールによる事故の再現）】

1. 車との衝突時の衝撃の強さを理解させるために、段ボール箱を自転車に見立てて、交差点から飛び出させる。
2. 自動車を時速約 50 キロ（会場によって速度は工夫する）で衝突させ、衝撃の強さを表現する。
また、事故の原因と普段の自分の行動と比べてどう感じたかを受講者数人から意見を聞く。衝撃の強さについても聞く。

【4. 事故回避方法の検証】

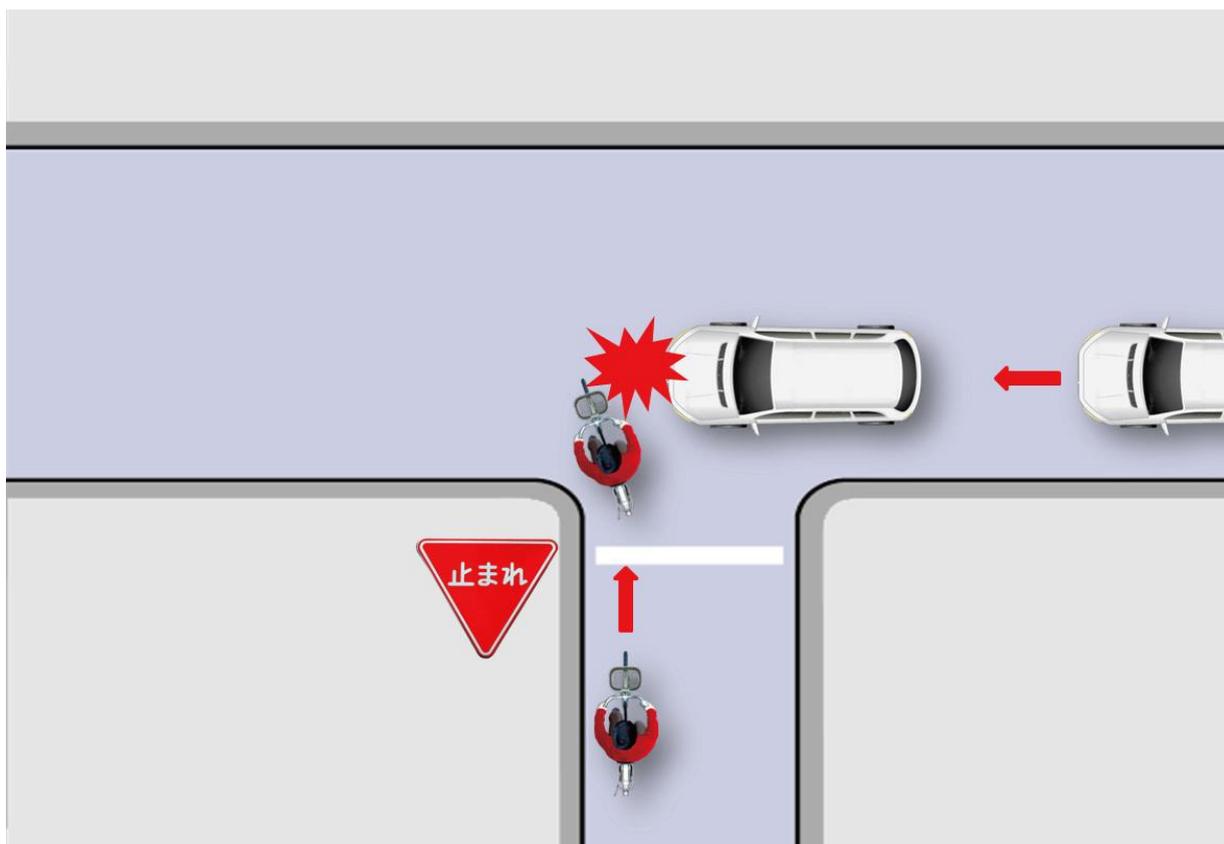
1. 事故の原因と普段の自分の行動と比べてどう感じたかを数名から意見を聞く。
2. この事故はどのようにすれば防げたのか、生徒に考えさせ、数名に発表してもらう。

【5. 生徒の実技体験】

1. 生徒の発表内容を元に、指導者が同じ場面について正しい模範走行を行い、解説する。
2. 参加者全員に正しい走行体験をさせる。

【指導上のポイントと留意点】

1. 事前に十分なリハーサルしておく。
2. 自動車に同乗させる際は、必ずシートベルトを着用させる。
3. 見学するポイント等を明示し、単に「事故再現」を見学するのではなく、「なぜ事故に至ったか」がわかるようにする。
4. 模範走行では、自転車を指導のポイントごとに停止させてから解説を行う。



◆ 体験学習 B : 20 分

テーマ	信号機のある交差点での事故再現
ねらい	<p>交差点で右左折する自動車と、自転車とが衝突する事故は、自転車が自動車の運転者から見えにくい位置にあることが要因の1つとなっている。ここでは、事故再現を通して交差点に潜む危険性を理解させるとともに、運転者の心理や行動特性にも触れ、危険を予測した運転の実践化を図る。</p> <p>① 自動車には運転者からは見えない死角があり、その死角に入ることの危険性を理解させる。</p> <p>② 交差点では無理な運転や思い込み運転が事故につながる危険性を高めることを理解させ、一度止まったの安全確認を身に付けさせる。</p>
役割・準備物	<p>指導者 1 人、自動車運転者 2 人、自転車運転者 1 人、合図係 1 人</p> <p>マイクロバス 1 台、乗用車 2 台、自転車 1 台（生徒実技用は別途用意）</p>

【1. 交通場面における危険の予測】

1. 図のように自転車と自動車を配置する。
自動車からはマイクロバスが死角となり、自転車が見えないような状況を設定する。
2. この交通場面からどのような危険が考えられるか、生徒に考えさせ、数名に発表してもらう（運転者の心理状況や行動についても考えるように促す）。

【2. 事故再現（指導員による事故の再現）】

1. 自動車に数名の生徒を乗車させた自動車（右折車）をゆっくり走行させる。
2. 同時に渋滞のため自動車に進路を譲ったマイクロバスの左側をすり抜けて、自転車を直進（飛び出し）させる。
3. 自動車 A と自転車が接触するぎりぎりの状況を再現する。
4. 同乗した生徒に自動車からどのように見えたかを発表してもらう。

【3. 事故回避方法の検証】

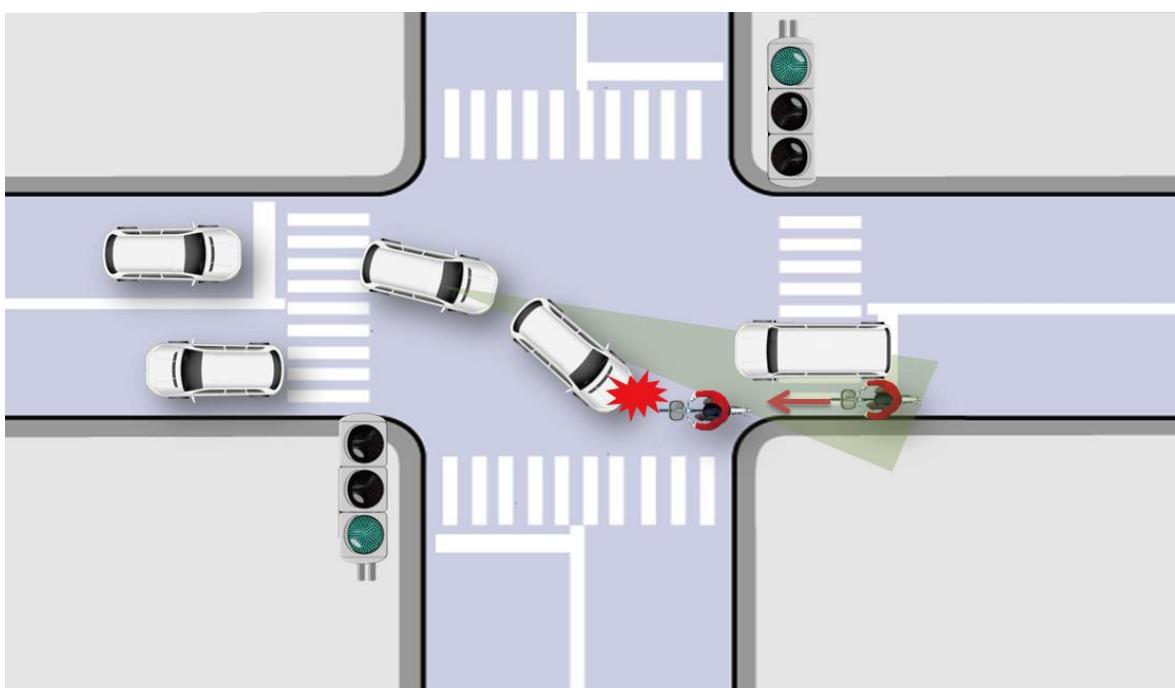
1. 事故の原因と普段の自分の行動と比べてどう感じたかを数名から意見を聞く。
2. この事故はどのようにすれば防げたのか、生徒に考えさせ、数名に発表してもらう。
 - ① 自動車の死角について（特に左右ミラー及びピラー）触れ、その死角に入ることの危険性について理解させる。
 - ② サンキュー事故の際の運転者の心理状況について理解させる。

【4. 生徒の実技体験】

1. 生徒の発表内容を元に、指導者が同じ場面について正しい模範走行を行い、解説する。
2. 参加者全員に正しい走行体験をさせる。

【指導上のポイントと留意点】

1. 事前に十分なリハーサルしておく。
2. 自動車に同乗させる際は、必ずシートベルトを着用させる。
3. 見学するポイント等を明示し、単に「事故再現」を見学するのではなく、「なぜ事故に至ったか」がわかるようにする。
4. 模範走行では、自転車を指導のポイントごとに停止させてから解説を行う。



◆ 体験学習 C : 20 分

テーマ	駐停車車両の側方通行での事故再現
ねらい	<p>駐停車車両の側方を通行する際、走行しながら首を後方に向ける安全確認は不十分になりがちで、バランスを崩したりすることもあり、危険性も高くなる。ここでは、駐停車車両の側方を通行する場合の危険について理解させるとともに、安全な走行方法を身につけさせることによって、事故防止を図る。</p> <p>① 駐停車車両の側方通行には様々な危険があることに気付かせる。</p> <p>② 自転車運転中は常に状況を読み取り、より安全な行動をとることが大切であることを理解させ、危険を予測した運転の実践化を図る。</p>
役割・準備物	<p>指導者 1 人、自動車運転者 2 人、自転車運転者 1 人、合図係 1 人</p> <p>ワンボックス 1 台、乗用車 1 台、自転車 1 台（生徒実技用は別途用意）</p>

【 1. 交通場面における危険の予測】

1. 図のように自転車と自動車を配置する。
2. この交通場面からどのような危険が考えられるか、生徒に考えさせ、数名に発表してもらう（運転者の心理状況や行動についても考えるように促す）。

【 2. 事故再現①（後方から走行してきた自動車 B との事故の再現）】

1. 自動車に生徒数名を乗車させ、駐停車中のワンボックスの右側を自転車（ヘッドホン使用）で通行させる。
2. 同時に自動車も徐行しながらワンボックスの右側を通行させ、自動車と自転車が接触するぎりぎりの状況を再現する。
3. 同乗した生徒に自動車からどのように見えたかを発表してもらう。

【 3. 事故再現②（駐停車車両のドアの開閉による事故再現）】

1. 自転車をマイクロバスの右側をすれすれに通行させ、運転席付近に自転車がきたときにドアを開け、ドアと自転車が接触するぎりぎりの状況を再現する。

【 4. 事故回避方法の検証】

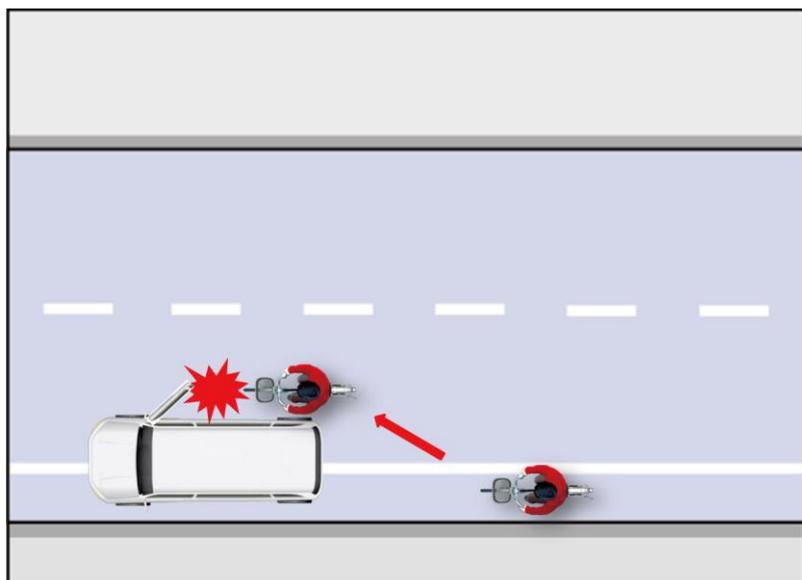
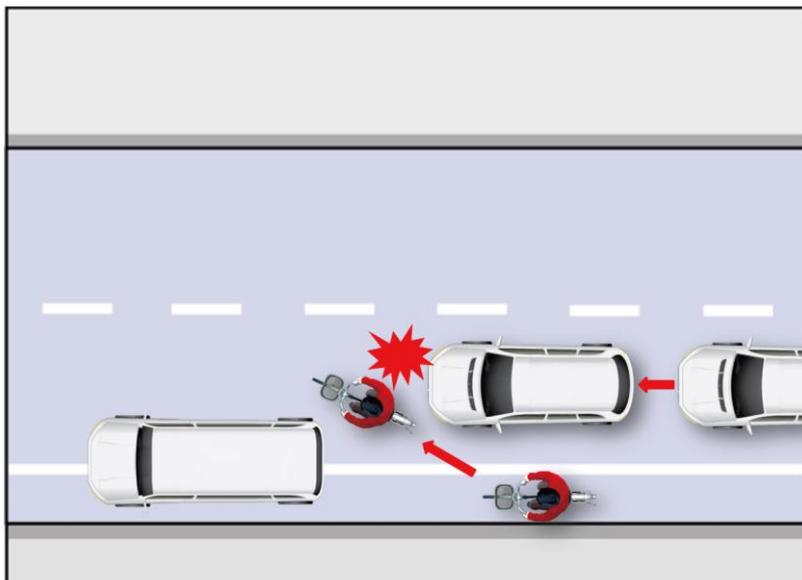
1. 事故の原因と普段の自分の行動と比べてどう感じたかを数名から意見を聞く。
2. この事故はどのようにすれば防げたのか、生徒に考えさせ、数名に発表してもらう。
 - ※ 無理に乗車して側方通行せず、自転車を押して歩くことも安全を図る上で大切であることに気づかせる。

【5. 生徒の実技体験】

1. 生徒の発表内容を元に、指導者が同じ場面について正しい模範走行を行い、解説する。
2. 参加者全員に正しい走行体験をさせる。

【指導上のポイントと留意点】

1. 事前に十分なりハーサルしておく。
2. 自動車に同乗させる際は、必ずシートベルトを着用させる。
3. 見学するポイント等を明示し、単に「事故再現」を見学するのではなく、「なぜ事故に至ったか」がわかるようにする。
4. 模範走行では、自転車を指導のポイントごとに停止させてから解説を行う。



◆ 体験学習D：20分

テーマ	ヘッドフォン等使用運転の危険性についての実験
ねらい	<p>ヘッドフォン等を使用しながら自転車運転は、周囲の音が聞きにくくなり、危険に気付くのが遅くなったり、対応が遅れたりして事故に遭う危険性が高まる。ここでは、実験を通じて、ヘッドフォン等使用時の自転車運転が危険であることに気付かせるとともに、他の交通利用者に危険や迷惑を及ぼすことにも触れ、自転車運転時の事故防止を図る。</p> <p>① ヘッドフォン等を使用しながら自転車に乗ることの危険性に気付かせる。</p> <p>② 他の交通利用者に危険や迷惑を及ぼすことを理解させる。</p>
役割・準備物	<p>指導者1人、音楽プレーヤー操作1人、自動車運転者2人</p> <p>乗用車1台、自転車1台、パイロン10本、音楽プレーヤー1台、ヘッドフォン（またはイヤホン）1個～</p>

【1. 実験の準備と事前説明】

1. 図のように自転車と自動車、パイロンを配置する。パイロンの間隔は1～2m間隔で配置する。
2. ヘッドフォンを使用していない場合と、使用している場合で、後方から近づいてくる自動車にどの位の距離で気付くかを生徒に予想してもらい、発表してもらう。

【2. 実験①（ヘッドフォンを使用していない場合）】

1. 生徒数名に自動車を背にして自転車に乗車させる（または立たせる）。
2. 他の受講者には、どの位の距離で生徒が自動車に気付くかを予想させる。
3. 自動車をゆっくりと走行させ、生徒が自動車に気付いた時に手をあげさせ、距離を測定する。

【3. 実験②（ヘッドフォンを使用している場合）】

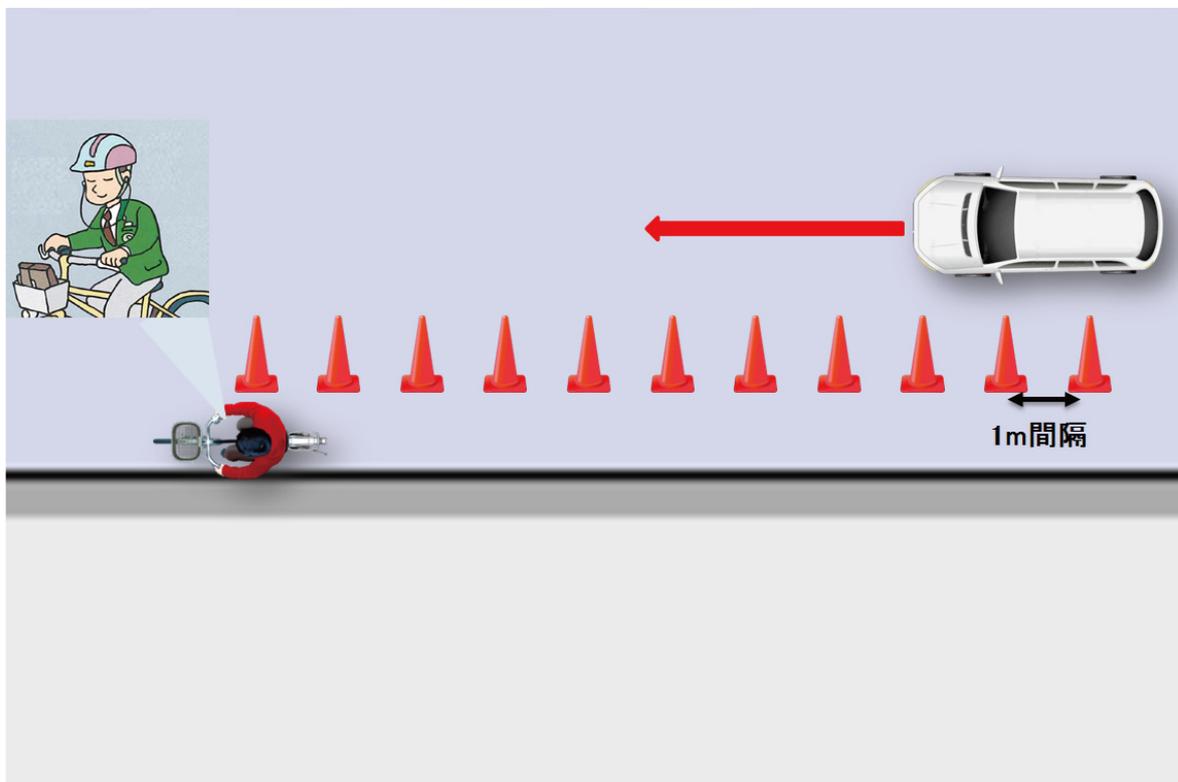
1. 携帯型音楽プレーヤーで音楽を再生させ、ヘッドフォンをしている状態で、実験①と同じ実験を行う。

【4. 危険の予測】

1. 「自動車の気付くのが遅れることで、どのような危険が考えられるか」を考えさせ、数名に発表してもらう。
2. 生徒数人から危険性について意見を聞くとともに、普段の自身の行動を振り返り、自己評価を促す。
3. 危険性について指導者がまとめる。

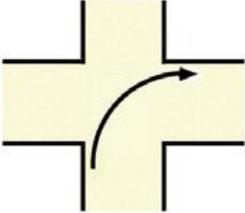
【指導上のポイントと留意点】

1. 事前に十分なリハーサルをしておく。自動車の走行速度を決める（徐行）とともに、どのくらいの距離で自動車に気付くかを把握しておく。
2. ヘッドフォンについては、インナータイプのイヤホンが望ましい。
3. 音楽プレーヤーの音量は、事前に確認しておく。



11. 自転車ルール学習における理解度チェック

次の設問に○、×で答えてください。

1. 自転車は車道通行が原則、歩道通行は例外である。
2. 車道通行の場合、安全であれば、特に通行する場所は決まっていない。
3. 歩行者用信号機の青の点滅は、横断を始めてはいけないという意味である。
4. バイクと自動車は、一時停止の標識・標示のある場所で一時停止をしなければならないが、自転車は走行スピードが遅いので、徐行すればそのまま通行してもよい。
5. 信号機のない交差点では、特に道路の優先関係はない。
6. 路側帯は歩行者・自転車が通行できる。
7. 信号機がない交差点で自転車が右折する場合には図のように曲がる。
8. 夜間は街灯などで明るい場所では、ライトを点灯しなくてもよい。
9. 雨の日に走行する場合は、周りがよく見えるように透明なビニール傘を使用するのがよい。
10. 携帯電話やスマートフォンはヘッドセットを使い、両手でハンドル操作をしていれば問題ない。
11. 飲酒運転は自動車やバイクを運転するときだけ禁止されており、自転車は禁止されていない。
12. 二人乗りは危ないのでするべきではないが、法律で禁止されているわけではない。
13. 自転車で3台以上並んで走るとは禁止されているが、2台までならよい。

12. グループ・ディスカッションの実践事例

【事例1：新1年生（全員）を対象としたグループ・ディスカッション例】

1. 時間：11：00～12：00（60分）
2. 主催：兵庫県立有馬高等学校新1年生（240名：40名×6クラス）
3. 実施者：アールドライバーズスクール西北・日本交通安全教育普及協会
4. テーマ：被害事故時の対応方法について
5. 内容：サンプル映像を基に、3名1組にてグループ・ディスカッションを実施した。
 - ① 交通場面観察：自転車通行可の歩道通行（ディスカッション）
 - ② 事件事例研究：歩道を横切る丁字路での交通事故（被害事故）（ディスカッション）
 - ③ まとめ：交通事故時の対応方法
6. 準備物：① ディスカッション用サンプル映像
 ② 発表用ワイヤレスマイク 数本
 ③ ワークシートA（交通場面観察用）
 ④ ワークシートB（事件事例研究用）
7. 役割：① リーダー1名（進行・全体説明など）
 ② フォロワー6名（1名が1クラスを担当し、ディスカッションと発表のサポート）
8. カリキュラム

時間		項目	内容
11:00～11:05	5分	事前説明等	① 開会 ② 資料配布
11:05～11:20	15分	交通場面観察	アイスブレイクを兼ねて全体で意見を出し合う。 「自転車通行可の歩道の通行」について ① 事前説明（学習の進め方の流れ） ② ビデオ視聴（前半のみ） ③ 全体で意見交換
11:20～12:00	40分	事件事例研究	「交通事故時の対応」について ① 事前説明 ② ビデオ視聴 ③ 個人学習（ワークシートB使用）・5分 ④ グループ・ディスカッション・15分 ⑤ 全体発表 ※10分 ⑥ まとめと留意点（事故時の対応方法）・10分

9. ワークシートA (交通場面観察用) : 歩道通行可の歩道

D5

自転車交通場面観察
自転車通行可の歩道



自転車通行可の歩道で高校生が起きた事故例 **総額約 1,450万円**
 平塚8年東京地方裁判所判決
 駅付近の混雑した歩道で、自転車に乗った男子高校生が主婦とすれ違ったときに、自転車のハンドルが主婦のショルダーバッグの肩ひもにひっかかり、主婦が転倒してケガをした。
 総額約とは、判決で加害者が支払を命じられた金額です (金額は概算額)。

● 映像 (前半) を見て考えよう！
 映像の中のルール違反をあげてみましょう。また、その違反によってどのような事故が起こるか考えてみましょう。

違反

 事故

● 映像 (後半) を見て考えよう！
 映像と普段の自分の行動を比べて、どのようなことを感じましたか？

.....

● 映像 (後半) を見て考えよう！
 なぜ、ルール違反をしてしまうのでしょうか？ (彼らはルールを知らないのでしょうか？ それとも、知っているがルール違反をしよう理由が、何かあるのでしょうか？)

.....

● みんなで話し合おう！

Q5

Q3とQ4についてグループで話し合い、意見をまとめてみましょう。

Q3 なぜ、ルール違反をしてしまうのでしょうか？

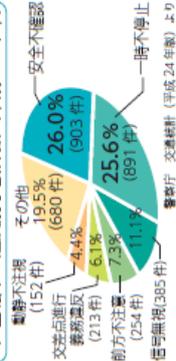
.....

Q4 どうすればルールを守り、安全に行動することができるようになるのでしょうか？

.....

高校生世代の自転車事故の特徴

◆ 自転車の違反別事故件数 (平成24年中)



自転車の事故、どこで起きているのか？

約8割が交差点で起きている

どんな交差点で起きているのか？

- 1位 信号機のない交差点
- 2位 信号機のある交差点
- 3位 交差点付近

自転車安全利用五則

- 1 自転車は、車道が原則、歩道は例外
 自転車は道路交通法上、「車道」と位置づけられています。したがって、歩道と車道の区分のあるところでは、自転車は車道を通行するのが原則です。また、自転車道がある場合は、そこを優先しなければなりません。
 【自転車歩道通行可の場合】
 ●普通自転車歩道通行可の標識・標示がある場合
 ●13歳未満の子ども、70歳以上の高齢者や身体の不自由な人が運転している場合
 ●道路工事や駐停車車両などで、安全のため、やむを得ない場合 など
- 2 車道は左側を通行
 自転車は、車道の左側を通行しなければなりません。
- 4 安全ルールを守る
 ●飲酒運転は禁止
 ●二人乗りは禁止
 ●並進は禁止
 ●夜間はライトを点灯
 ●番号を守る
 ●交差点での一時停止と安全確認
- 5 子どもはヘルメットを着用
 幼児・児童(13歳未満の者)を保護する責任のある者は、幼児・児童を自転車に乗せさせる時は、乗車用ヘルメットを着用させようようにしましょう。

E4 事故再現
歩道が横切るT字路での事故



歩道を横切るT字路で起きた事故例 **賠償額 203万円**
 平成21年の交通事故総合対策センターによる調査結果
 被害者の自転車が自転車通行可の歩道を走行し、T字路を横断しようとしたとき加害者の普通貨物自動車と衝突しケガを負った。
 賠償額とは、別状で別害者が支払を命じられた金額です (金額は税別額)。

● 映像を見て考えよう！
Q1 どうして事故が発生してしまったのでしょうか？ 自転車の運転者の心理状態がどのようなものかも想像して記入しましょう。

原因

 心理状態

Q2 映像と普段の自分の行動を比べて、どのようなことを感じましたか？

Q3 このような事故に遭わないようにするために、あなたはどのように行動しますか？

● みんなで話し合おう！

Q4

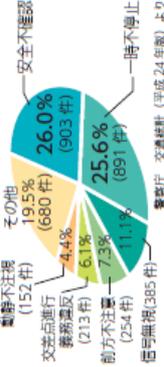
グループディスカッション
 映像を見て感じたこと、気づいたことをグループで話し合い、映像のような状況で事故に遭わないためにはどうすればよいかまとめてみましょう。

感じたこと、気づいたこと

 事故に遭わないためには

高校生世代の自転車事故の特徴

◆ 自転車の違反別事故件数 (平成24年中)



自転車事故、どこで起きているのか？

- 約8割が交差点で起きている
- どんな交差点で起きているのか？
- 1位 信号機のない交差点
 - 2位 信号機のある交差点
 - 3位 交差点付近

自転車安全利用五則

- 1 自転車は、車道が原則、歩道は例外
 自転車は道路交通法上、「軽車両」と位置づけられています。したがって、歩道と車道の区分のあるところでは、自転車は車道を通行するのが原則です。また、自転車道がある場合は、そこを通行しなければなりません。
 【自転車歩道通行可の標識・標示がある場合】
 ● 普通自転車歩道通行可の標識・標示がある場合
 ● 13歳未満の子ども、70歳以上の高齢者や身体の不自由な人が運転している場合
 ● 道路工事や駐停車両面などで、安全のため、やむを得ない場合 など
- 2 車道は左側を通行
 自転車は、車道の左側を通行しなければなりません。
- 4 安全ルールを守る
 ● 飲酒運転は禁止
 ● 二人乗りは禁止
 ● 前道は禁止
 ● 夜間はライトを点灯
 ● 指号を守る
 ● 交差点での一時停止と安全確認
- 5 子どもはヘルメットを着用
 幼児・児童 (13歳未満の者) を保護する責任のある者は、幼児・児童を自転車に乗せさせる時は、乗車用ヘルメットを着用させるようにしましょう。

10. 実施風景



全体説明



フォロワーによる個人学習・ディスカッションのサポート



生徒による発表

【事例2：新1年生（全員）を対象としたグループ・ディスカッション例】

1. 時間：9：00～14：00（300分）
2. 主催：三重県立亀山高等学校新1年生（280名：35名×8クラス）
3. 実施者：カメヤマドライバースクール・日本交通安全教育普及協会
4. テーマ：安全な自転車通学について
5. 内容：サンプル映像を基に、4名1組にてグループ・ディスカッションを実施した。
 - ① 交通場面観察：信号機のある交差点（ディスカッション）
 - ② その他、危険実験・交通法規学習など
6. 準備物：① ディスカッション用サンプル映像
② ワークシート（交通場面観察用）
7. 役割：① リーダー1名（進行・全体説明など）
② フォロワー1名（ディスカッションのサポート）
8. カリキュラム

	1組	2組	3組	4組	5組	6組	7組	8組
8:50	開会・挨拶							
9:00	自転車点検							
9:10 ～ 10:00	交通法規学習、 安全講話、学科試験		グループ・ディスカッション		危険実験 A→B	危険実験 B→C	危険実験 C→D	危険実験 D→A
10:10 ～ 11:00	グループ・ディスカッション		交通法規学習、 安全講話、学科試験		危険実験 C→D	危険実験 D→A	危険実験 A→B	危険実験 B→C
11:10 ～ 12:00	危険実験 A→B	危険実験 B→C	危険実験 C→D	危険実験 D→A	交通法規学習、 安全講話、学科試験		グループ・ディスカッション	
12:00	昼休み（～13:00）							
13:00 ～ 13:50	危険実験 C→D	危険実験 D→A	危険実験 A→B	危険実験 B→C	グループ・ディスカッション		交通法規学習、 安全講話、学科試験	
14:00	閉会・挨拶							

危険実験A：一時停止標識のある交差点での事故再現

危険実験B：信号機のある交差点での事故再現

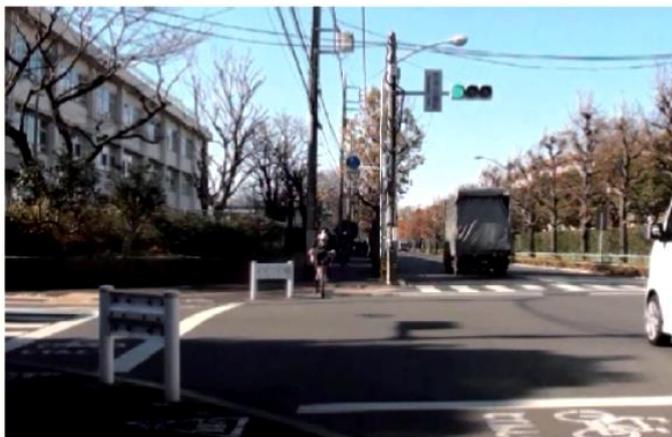
危険実験C：駐車車両の側方通過の危険性

危険実験D：ヘッドフォン（イヤホン）使用しながら運転の危険性

9. ワークシート (交通場面観察)

亀山高校生の安全を自分たちで考えよう！

グループディスカッション (信号機のある交差点)



● 信号機のある交差点で高校生が起こした事故例

男子高校生が朝、赤信号を無視して横断歩道を走行中、62歳の男性が運転するオートバイと衝突。62歳の男性は13日後に死亡した。(東京地方裁判所、平成17年9月14日判決)

賠償額 4,043万円

賠償額とは、判決文で加害者が支払いを命じられた金額です (金額は概算額)。

個人学習

① 映像の中のルール違反をあげてみましょう。また、その違反によってどのような事故が起こるか考えてみましょう。

(違反)

(事故)

② 映像と普段の自分の行動を比べて、どのようなことを感じましたか？

③ なぜ、ルール違反をしてしまうのでしょうか？ (彼らはルールを知らないのか？それとも、知っているけどルール違反をしてしまう理由が、何かあるのでしょうか？)

④ どうすればルールを守り、安全に行動することができるようになるのでしょうか？

グループディスカッション

⑤ ③と④についてグループで話し合い、意見をまとめてみましょう。

③ なぜ、ルール違反をしてしまうのでしょうか？

④ どうすればルールを守り、安全に行動することができるようになるのでしょうか？

高校生世代の自転車事故の特徴

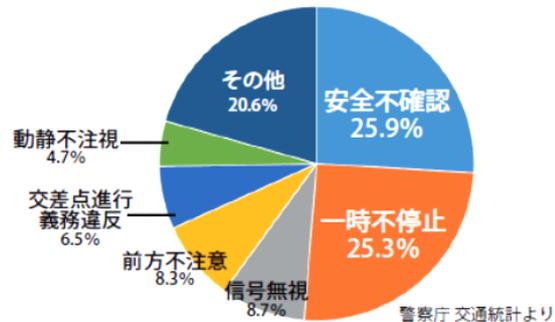
● 自転車の事故どこで起きているのか？

約8割が交差点で起きている

● どんな交差点で起きているのか？

- 1位 信号機のない交差点
- 2位 信号機のある交差点
- 3位 交差点付近

● 自転車の違反別事故件数（平成26年中）



自転車安全利用五則

① 自転車は、車道が原則、歩道は例外

自転車は道路交通法上、「軽車両」と位置づけられています。自動車や自動二輪と同じ「車両」なので、歩道と車道の区分のあるところでは、自転車は車道を通行するのが原則です。また、自転車道がある場合は、そこを通らなければなりません。

② 車道は左側を通行

自転車は、車道の左側を通行しなければなりません。

③ 歩道は歩行者優先で、車道寄りを徐行

自転車も例外的に歩道走行ができる場合があります。しかし歩道上ではあくまで歩行者優先です。歩道を走るときは、歩道の車道寄りまたは指定された部分をすぐに停止できる速度で走り、歩行者の妨げとなる場合は一時停止しなければなりません。

【自転車が歩道走行ができる場合】

- 歩道に「自転車歩道通行可」の道路標識がある場合
- 子どもや高齢者などが運転している場合
- 車道または交通の状況からみて、やむを得ない場合

④ 安全ルールを守る

- 飲酒運転の禁止
- 二人乗りは禁止
- 並進走行の禁止
- 夜間はライトを点灯
- 信号を守る
- 交差点での一時停止と安全確認

⑤ 子どもはヘルメットを着用

自転車乗用中の事故による被害を軽減させるため、幼児・児童には乗車用ヘルメットを着用させましょう。

10. 実施風景



全体説明



サンプル映像視聴



ディスカッション



ディスカッション



安全行動の誓い「私の行動目標」

13. 様々な実践好事例

【事例1：全校生徒（824名）を対象とした100分での展開事例】

1. 開催日：2018年5月22日（火）11:00～12:40（100分）
2. 主催：兵庫県立西脇高等学校 全校生徒（824名：7クラス×3学年）
3. 実施者：西脇自動車教習所・アールドライバーズスクール西北・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：西脇高等学校 駐車場・体育館・柔道場
5. テーマ：安全な自転車通学について
6. 内容：①右直事故・内輪差事故再現等の見学
 ②交通場面観察（信号機のない交差点）でのグループ・ディスカッション
 ③自転車法規学習
7. 準備物：事故再現見学：乗用車・自転車・ラインカー・パイロン・PPロープ
 グループ・ディスカッション：ディスカッション用サンプル映像・ワークシート
 法規学習：法規学習用テキスト
8. カリキュラム：

時間		1年	2年	3年
9:00～11:00	2:00	準備		
11:00～11:25	0:25	【校舎上層階から実験見学】 交差点での危険性 右直・内輪差俯瞰観察	【体育館】 グループ・ディスカッション (定点観測動画)	【柔道場】 法規学習
11:25～11:35	0:10	移動・休憩		
11:35～12:00	0:25	【体育館】 グループ・ディスカッション (定点観測動画)	【柔道場】 法規学習	【校舎上層階から実験見学】 交差点での危険性 右直・内輪差俯瞰観察
12:00～12:10	0:10	移動・休憩		
12:10～12:35	0:25	【柔道場】 法規学習	【校舎上層階から実験見学】 交差点での危険性 右直・内輪差俯瞰観察	【体育館】 グループ・ディスカッション (定点観測動画)
12:35～		撤収		

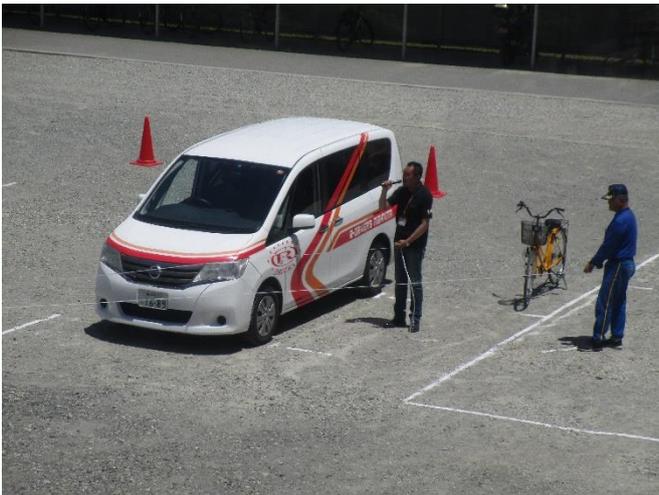
9. 実施時の工夫など：

- ① 見学のしやすさ、使用する動画等のスライドの見やすさを考慮し、学年ごとに分け、3カ所をローテーションで回ってもらった。
- ② 実験見学は、生徒数が多く、同一の高さからでは後方の生徒が見えないため、校舎上層階（2～3階）からの見学とし、代表者にのみ体験してもらった。他の生徒には体験者の感想を共有することで、理解を促した。

- ③ グループ・ディスカッションはグループに分かれ話し合うため、広めのスペースをする。そのため、体育館を使用し、広がるようにした。
- ④ 法規学習では、生徒が交通ルール違反によって、どのような交通事故が起こるかをイメージしやすいように、事件事例を混ぜることで、事故を身近に感じてもらった。



グループ・ディスカッション風景



サンキュー事故の説明風景



2階廊下からの見学

【事例 2：定時制の生徒を対象に、教習所で講習を実施】

1. 開催日：2018年7月9日（月）18:00～20:00（120分）
2. 主催：兵庫県立赤穂高等学校定時制 全校生徒（50名：5クラス＝1～4学年）
3. 実施者：赤穂自動車教習所・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：赤穂自動車教習所 第1教室、所内コース
5. テーマ：自転車の交通ルール
6. 内容：①赤穂警察署 講話
②法規学習
③事故再現見学（歩道通行における危険性、車道右側通行の危険性、イヤホン使用運転の危険性）
7. 準備物：法規学習：法規学習用テキスト
事故再現見学：乗用車・自転車・パイロン・PPロープ
8. カリキュラム：

時間		内容
18:00～18:10	0:10	赤穂警察署 講話
18:10～19:00	0:50	法規学習
19:00～19:05	0:05	移動
19:05～19:20	0:15	歩道通行における危険性
19:20～19:35	0:15	車道右側通行の危険性
19:35～19:50	0:15	イヤホン使用運転の危険性

9. 実施時の工夫など：
 - ① 最大の特徴は、講習の実施場所が赤穂自動車教習所だったこと。教習所が高校に近い場所に位置していたうえに、全校生徒が50名と少人数で集団行動しやすかったことなどから教習所での実施が可能になった。
 - ② 教習所における講習実施は、多くの波及効果をもたらした。教習所側は、普及協作成の指導演をベースに座学と実技を組み合わせたカリキュラムを作成、講習に積極的に関わった。高校と緊密に連携しながら講習を作り上げることができたことは、各指導員の意欲を引き出し、資質向上にもつながった。
 - ③ 受講する生徒側の反応も良かった。定時制に通いながら仕事をしていたり、四輪免許の取得が可能な年齢になっていたりする生徒も多い。教習所での実施に多くの生徒が高い関心を示した。



赤穂警察署による講話



教習所内のコースで実施した実技指導



定時制生徒にあわせた夜の講習だったため、日没後の状況を再現できた

【事例3：田園部と住宅街が隣接する環境における指導】

1. 開催日：2018年7月10日（火）10:50～12:40（110分）
2. 主催：兵庫県立多可高等学校 全校生徒281名（3クラス×3学年）
3. 実施者：北播ドライビングスクール・アールドライバーズスクール西北・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：多可高等学校 駐車場・体育館・多目的ホール
5. テーマ：安全な自転車通学について
6. 内容：①事故再現見学（イヤホン使用運転の危険性、交差点での危険性）
②交通場面観察（信号機のない交差点）を通したグループ・ディスカッション
③法規学習
7. 準備物：事故再現見学：乗用車、自転車、イヤホン、音楽プレーヤーなど
グループ・ディスカッション：ディスカッション用サンプル映像・ワークシート
法規学習：法規学習用テキスト
8. カリキュラム：

時間		1年	2年	3年
9:00～10:50	1:50	準備		
10:50～11:20	0:30	イヤホン使用運転の危険性 交差点での危険性	グループ・ディスカッション	法規学習
11:20～11:30	0:10	移動・休憩		
11:30～12:00	0:30	グループ・ディスカッション	法規学習	イヤホン使用運転の危険性 交差点での危険性
12:00～12:10	0:10	移動・休憩		
12:10～12:40	0:30	法規学習	イヤホン使用運転の危険性 交差点での危険性	グループ・ディスカッション
12:40～13:10	0:30	移動・撤収		

9. 実施時の工夫など：

- ① 生徒たちは学年ごとに3つのグループに分かれ、体育館（グループ・ディスカッション）、多目的ホール（法規学習）、駐車場（事故再現見学）の3か所をローテーションして講習に参加。スムーズな進行を確保できた。
- ② 「過去に何度も講習会等を開いて自転車の安全利用を呼び掛けてきたが、しっかり理解されていない」（事前ヒアリングより）という課題に対し、交通ルールの重要性を強く訴える内容の法規学習を展開。事故事例を交えて解説し、交通ルールを守らないことが

どのような事故につながるかを具体的にイメージさせるよう配慮した。

- ③ 周囲に水田が広がる田園部に建つ同校。見通しのよい田んぼの中の通行は、油断しやすくスピードも出やすい。一方、隣接して住宅街があり、すぐに見通しの悪い交差点が目の前に現れる——。このような環境ではどのような危険があるのか。グループ・ディスカッションでは、普段の自分たちの交通行動を振り返り、安全な自転車利用について皆で話し合った。事故再現見学でも、自転車運転中のイヤホン使用が自分だけでなく他の交通利用者にも危険や迷惑を及ぼしていることを理解することができた。



体育館を活用したグループ・ディスカッション



自転車のルールをしっかりと学んだ法規学習



駐車場を利用して開催した事故再現見学

【事例4：自転車通学8割の高校で、1単元のグループ・ディスカッションを実施】

1. 開催日：2018年7月11日（水）12:10～13:00（50分）
2. 主催：兵庫県立夢前高等学校 全校生徒 341名（3クラス×3学年）
3. 実施者：福崎インター自動車学校・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：夢前高等学校 体育館
5. テーマ：夢前高校生の安全を自分たちで考えよう！
6. 内容：①交通場面観察（信号機のない交差点）を通したグループ・ディスカッション
7. 準備物：グループ・ディスカッション：ディスカッション用サンプル映像・ワークシート
8. カリキュラム：

時間		内容
11:00～12:10	1:10	準備
12:10～12:15	0:05	導入（紹介・流れの説明など）
12:15～12:25	0:10	動画視聴・個人学習
12:25～12:30	0:05	発表（違反・事故の予測）
12:30～12:40	0:10	グループ・ディスカッション （なぜ危険行動をするか？）
12:40～12:55	0:15	グループ・ディスカッション （どうしたら安全に行動できるか？）
12:55～13:00	0:05	まとめ（事故の影響／行動目標）

9. 実施時の工夫など：

- ① 自転車通学をしている生徒の割合が80%と極めて高い同校。警察を招いて講話をしてもらったり、イヤホンやスマホ使用の危険性について注意喚起したりしているが、目立った効果は上がっていないのが現状という。そこで今回の講習では、交通ルールを守ることの重要性や事故がもたらす影響などについて、生徒自ら考えさせることを目的に、グループ・ディスカッションを中心にしたカリキュラムを設定した。
- ② 体育館で実施したディスカッションでは、最初に一時停止義務交差点の定点観測ビデオを視聴、「どのような危険（事故）が考えられるか」「なぜ、危険な行動をしてしまうのか」「どのようにすれば、安全に行動できるのか」などについて各自に考えてもらった。
- ③ 何人かの生徒にそれぞれの考えを発表してもらった後、グループ・ディスカッションに移った。最後に、交通事故は他人事ではなく身近な問題であることを認識できるようになった生徒たちに、今後の自身の行動目標について発表してもらった。
- ④ 教習所の講習運営は今回が初めての挑戦だった。不慣れな部分もあったが、全校生徒に対して、自分たちで考えたカリキュラムをしっかりと実践することができた。講習は今年度も継続することになり、すでに夢前高校から教習所に講習開催の依頼があったという。教習所の取り組み姿勢を高校側も高く評価してくれた証左だろう。



体育館でのグループ・ディスカッションの様子。ビデオ視聴後、まずは各自が「どのような危険があるか」などについて考えた

【事例5：3種類の体験学習を分刻みでローテーション】

1. 開催日：2018年7月17日（水）9:50～11:40（110分）
2. 主催：兵庫県立川西明峰高等学校 1年生約300名（50名×6グループで展開）
3. 実施者：阪神自動車学院・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：川西明峰高等学校 通路・グラウンド・駐車場・体育館
5. テーマ：安全な自転車通学について
6. 内容：①交通場面観察（信号機のない交差点）を通したグループ・ディスカッション
②事故再現見学（信号機のある交差点の危険性、イヤホン使用運転の危険性、自動車と自転車による停止距離の差）
7. 準備物：事故再現見学：乗用車、自転車、イヤホン、音楽プレイヤー、拡声器、カラーコーン、メジャー、石灰ラインカーなど
グループ・ディスカッション：ディスカッション用サンプル映像・ワークシート
8. カリキュラム：

時間		A	B	C	D	E	F
		50名	50名	50名	50名	50名	50名
9:50～9:55	0:05	集合・開会					
10:00～10:12	0:12	グループ・ ディスカッション (定点観測動画)			体験1	体験2	体験3
10:14～10:26	0:12				体験3	体験1	体験2
10:28～10:40	0:12				体験2	体験3	体験1
10:50～11:02	0:12	体験1	体験2	体験3	グループ・ ディスカッション (定点観測動画)		
11:04～11:16	0:12	体験3	体験1	体験2			
11:18～11:30	0:12	体験2	体験3	体験1			
11:35～11:40	0:05	閉会					

9. 実施時の工夫など：

- ① 屋外で実施した体験学習が3種類あり、充実していた。特に、「自転車の制動距離」の体験学習は、同校だけで実施したユニークな実験だった。
- ② タイヤが細くて接地面積が少ない自転車は、ブレーキが利きにくく止まりにくい乗り物だが、このことを知らない人は多い。そこで、時速20～25キロで走行させた自動車と自転車で同時にブレーキをかけ、制動距離に違いがあるかどうか観察した。実験の結果、自転車の方が停止距離は長くなり、自転車はすぐには止まれないことが確認できた。
- ③ 制動距離の比較について事前に生徒たちに予測させたところ、「車が長く、自転車は短い」と予想する人が多かった。このような固定観念が正しくないことを理解することによって、歩道通行時に必要な「徐行」の重要性も理解でき、安全な走行方法を身につけることが期待できた。実験で自転車の運転を担当した教習所の指導員は汗びっしょりで指導に当たっていた。指導員が一生懸命取り組み、その熱意は必ずや生徒にも伝わるだろうと思わせた。
- ④ 同校の周囲は坂道が多い住宅街になっている。交差点で止まらず、スピードを出す生徒

も多く、近隣からの苦情も少なくないという。学校としても自転車の安全利用は重要課題と認識しており、対策モデル校にも指定されて取り組みを強化しているところだ。実際、今回の講習も、充実した内容を午前中の限られた時間を分刻みで使って展開したものであった。講習に対して高校側も並々ならぬ意欲を示したと言えるだろう。



体育館で実施したグループ・ディスカッション



交差点をグラウンドに再現し、危険性を確認



イヤホンを着し、後方からの乗用車の接近に気付くかどうかを体験した



時速 20~25 キロ程度だと、自転車は乗用車よりも制動距離が長い

【事例 6：下校時の生徒の様子を撮影した動画を教材として活用】

1. 開催日：2018年7月18日（水）10:40～11:30（50分）
2. 主催：兵庫県立宝塚東高等学校 全校生徒約900名（23クラス）
3. 実施者：阪神自動車学院・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：宝塚東高等学校 体育館
5. テーマ：自転車の正しい通行方法（自転車安全利用五則）
6. 内容：①法規学習
7. 準備物：法規学習：法規学習用テキスト
8. カリキュラム：

時間		内容
9:30～10:40	1:10	準備
10:40～11:30	0:50	法規学習
11:30～12:00	0:30	撤収

9. 実施時の工夫など：

- ① これまで警察署講話などを中心とした安全教育を実施してきたが、依然として「登下校時のイヤホン・スマホ使用」「坂道での信号無視」などが絶えないという宝塚東高校。事前の高校側に対するヒアリングでは、「900名の全校生徒を体育館に集めて開催するため、グループ・ディスカッションの実施などは難しいと思うが、動画を用いるなど何か新しい工夫ができれば」との要望が出されていた。
- ② この要望に的確に応えたのが教習を担当した阪神自動車学院だ。高校が課題と指摘した「坂道での信号無視」などの問題行動を、効果的な手法であると期待された「動画」で捉えた。つまり、自転車に乗って下校する生徒たちの現実の姿を動画で撮影、これを法規学習の教材スライドに盛り込んで実際の講習に活用したのである。動画には、くだんの坂道で信号無視をしたり、歩道を徐行していなかったり、道路を並進していたりする生徒たちの様子がおさめられていた。
- ③ 講習に参加した生徒たちは、自分たちの行動のどこがどう危険なのかを具体的に学習することができた。「知らない誰か」が登場する出来合いの教材ではなく、まさに「わが身」と「わが振る舞い」を手掛かりに、自転車の正しい通行方法を学ぶことができた。撮影された動画は、生徒たちの興味と関心を引き出すための最適な教材だった。
- ④ 今回、教習所は事前の打ち合わせから参加、その後も高校側と密に連携してきた。忙しい教習の合間を縫って高校周辺の交通環境を視察、自転車で通う生徒たちの様子を撮影するなど効果的な教材作りに全力を上げた。講習後にも改めて生徒たちの様子を視察、「まだ信号で止まらない生徒がいる。講習の効果が薄いのか」と悔しがった教習所の教官もいた。
- ⑤ 地域の危険や課題を最もよく把握しているのは地域の人たちだ。地域に生活する教習所

の教官だからこそ、高校側の要望に応え、どこに危険があるのか把握して、そこをピンポイントに取り上げることができた。地元企業の立場を生かして効果的な学習につなげることができた。本事例は、高校と教習所の効果的な連携を示す好例となった。



全校生徒が集まった体育館で始まった法規学習。教習所スタッフが運営を担当した



教習所が撮影した動画。宝塚東高校の生徒たちが自転車で通行する様子がおさめられている。中には坂道を勢いよく下ってきて、信号無視をして交差点を通過する生徒の姿も

【事例7：室内実験を工夫し、体育館で効果的な体験学習を実施】

1. 開催日：2018年7月19日（木）9:40～11:30（110分）
2. 主催：兵庫県立東播磨高等学校 全校生徒約850名
3. 実施者：東播自動車教習所・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：東播磨高等学校 体育館
5. テーマ：自転車の交通ルールについて
6. 内容：①法規学習
②室内実験（錯視、ながらスマホの危険性、イヤホン使用運転の危険性、スタントマン事故再現映像）
7. 準備物：法規学習：法規学習用テキスト
室内実験：事故再現映像、台車、スピーカー
8. カリキュラム：

時間		内容
8:30～9:40	1:10	準備
9:40～10:30	0:50	座学（自転車の交通ルールについて）
10:30～10:40	0:10	休憩
10:40～11:30	0:50	室内実験（錯視、ながらスマホ、イヤホン、スタントマン事故再現映像）
11:30～12:30	1:00	撤収

9. 実施時の工夫など：
 - ① 約850名の全校生徒を体育館に集め、映像を用いた法規学習と室内実験を実施した。屋外のグラウンドで、実際の乗用車や自転車を用いた体験学習ができなかったことから室内実験を工夫。イヤホン使用の危険性に関する体験学習の「室内バージョン」を考案して運用、その有効性を確認できた。
 - ② まず、3年生2～3人をステージにあげ、イヤホンを装着してもらった。ステージ後方から、乗用車に見立てた台車にスピーカーを乗せ、エンジン音を再生しながら少しずつ被験者に接近させた。普通乗用車、救急車の2つのパターンで実験し、後方からの接近に気付くかどうか実験した。
 - ③ 実験の結果、イヤホンを使用していると、乗用車の接近に気付きにくいことがわかった。想像以上に聞こえにくいことに、ステージ下から見学していた下級生も驚いていた。今回の新たな試みにより、グラウンドで実際の車両を使わなくても、室内で台車を使って代替することが可能であり、教育効果も十分に期待できることがわかった。このほか、「ながらスマホ」の危険性などについても、映像表現を工夫した動画で解説した。



全校生徒を体育館に集めた法規学習



乗用車に見立てた台車を使い、イヤホン使用の危険性を確認した室内実験

【事例 8：特別支援学校の生徒たちに、シンプルで分かりやすい講習】

1. 開催日：2018年9月4日（火）9:35～12:00（145分）
2. 主催：兵庫県立阪神昆陽（こや）特別支援学校 全校生徒約 140名
3. 実施者：阪神自動車学院・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：阪神昆陽特別支援学校 駐車場・体育館
5. テーマ：安全な自転車通学について
6. 内容：①法規学習
②事故再現見学（イヤホン使用運転の危険性、信号機のある交差点の危険性）
7. 準備物：法規学習：法規学習用テキストなど
事故再現見学：乗用車、自転車、イヤホン、音楽プレイヤー、パイロンなど
8. カリキュラム：

時間		A	B	C	D
		約 35 名	約 35 名	約 35 名	約 35 名
9:35～9:45	0:10	集合・開会			
9:55～10:15	0:20	法規学習		体験 1	体験 2
10:20～10:40	0:20			体験 2	体験 1
10:55～11:15	0:20	体験 1	体験 2	法規学習	
11:20～11:40	0:20	体験 2	体験 1		
11:50～12:00	0:10	閉会			

9. 実施時の工夫など：

- ① 阪神昆陽特別支援学校は、知的障害のある生徒の社会的・職業的自立に必要な能力や態度を育てる「キャリア教育」に取り組んでいる。知的障害のある生徒たちに対しては、わかりやすくシンプルに伝えることが何よりも重要で、それができれば生徒たちにしっかり理解してもらえることが確認できた講習だった。
- ② わかりやすく伝える工夫はいくつかある。法規学習であれば、キーワードをきちんと伝えることに留意した。「青信号を守ろう」「交差点ではドライバーと目を合わせてお互いの存在を確認しよう（アイコンタクトをとろう）」「自転車は並んで走ったら危ないから、並んで走らないようにしよう（並進禁止）」など、シンプルなメッセージを強調した。
- ③ 交差点における右直事故の体験学習でも、実際に生徒に乗用車の運転席に座らせて、「自転車の姿がドライバーには見えていないね」とドライバー視点を確認してもらった。イヤホンを使用すると後方から接近する乗用車のエンジン音が聞こえにくいことも各自に体験してもらい、「だからイヤホンはしてはいけないよ」と指導した。「ルールがあるから違反したらダメ」と言葉で説明するよりも、実際に体験してもらい、危険性を肌で感じてもらったほうが、より生徒たちの理解は深まった。

- ④ 講習後、支援学校の担当教諭から生徒たちの感想メッセージが寄せられた。主なものは以下の通り。事故の恐ろしさや交通安全の重要性について、支援学校の生徒たちなりに理解していることがうかがえる。
- ・イヤホンをつけて登校することが危ないとわかりました。車が来ているのがわからなかったのではとしました。これからは音量を下げようと思いました。
 - ・車道は左側通行を意識して、乗ろうと思いました。
 - ・死角体験ではあまりにもいろいろなものが見えてないんだなと思いました。自転車に乗る機会があるので気をつけたいです。
 - ・自動車の免許証を取ろうと思ってますけど、事故が起こるととても怖いと思いました。

【事例9：高校2、3年生が「島のすべての下級生」を交通安全指導】

1. 開催日：2018年12月14日（金）9:00～12:30（210分）
2. 主催：兵庫県立家島高等学校 幼稚園（全員8名）／小学校（全員74名）／中学校（全員37名）／高校（全員81名）
3. 実施者：日本交通安全教育普及協会
4. 会場：家島小学校 教室・体育館・グラウンド
5. テーマ：自転車の交通ルール
6. 内容：①法規学習
 ②交通ルールに関するクイズ・ジャイロ実験
 ③実技（初級実技・法規走行）
 ④見学（車両特性）
 ⑤反射材作成
 ⑥VRグループ・ディスカッション
7. 準備物：法規学習：法規学習用テキスト
 交通ルールに関するクイズ・ジャイロ実験：ジャイロ実験道具
 実技・見学：パイロン、自転車、乗用車、信号（青・赤のプラカード）
 反射材作成：反射材および作成キット
 VRグループ・ディスカッション：VRゴーグル

8. カリキュラム：

時間		幼稚園	小1・2	小3～6	中1～3	高1	高校2・3
8:40～9:00	0:20					8:30 S H R 8:40 ドラレコ視聴	
9:00～9:20	0:20	開会式					
9:20～9:30	0:10	移動					
9:30～10:15	0:45	交通ルールに関するクイズ			法規学習		準備・リハ 下級生指導補助 反射材作成
10:15～10:25	0:10	移動・休憩					
10:25～11:15	0:45	初級実技		法規走行	車両特性		下級生指導補助 反射材作成
11:15～11:20	0:05	移動・休憩					
11:20～11:40	0:20	閉会式					
11:40～11:45	0:05	移動・休憩					
11:45～12:30	0:45				VR体験	VRを用いたグループ・ディスカッション	

9. 実施時の工夫など：

- 兵庫県姫路市の家島は姫路港の沖合約 18 キロの播磨灘に浮かぶ。面積 5.4 平方キロ、人口約 2,700 人（2015 年国勢調査）の小さな島だ。近年は島の人口が激減し、同校の生徒も約 7 割は姫路市本土から船で通学しているという。
- 同校では前年の 2017 年に全校生徒が参加する講習を実施した。文部科学省のモデル校に指定された 2018 年も前回とは違った形での講習を検討、前の年に一度学習している高校 2、3 年生が指導員として、幼稚園児から高校 1 年生までの島のすべての下級生に交通安全を教える交通安全教室を開催することした。
- 会場となったのは家島小学校のグラウンドや体育館。高校 2、3 年生は指導補助の役割を担い、グラウンドを広く使った大人数の交通安全クイズでの進行を手伝った。ジャイロ実験、「初級実技」や「法規走行」などの実技、「車両特性」を理解する見学のカリキュラムでも 2、3 年生が運営を補助した。指導補助を担当しなかった 2、3 年生も、手作りの反射材を作成して、子どもたちにプレゼントした。
- 島の子供たちは、先輩である高校 2、3 年生から交通安全について学ぶことができ、交通安全に関する知識と技術を身につけた。後輩たちを指導した先輩たちにも、率先垂範の意識が芽生えることが期待できた。幼稚園児から高校生まで、島の子どもたちの交通安全意識は確実に底上げされたはずだ。



会場になった家島小学校のグラウンド。幼稚園児から高校生までの島の子どもたち全員が交通安全について学んだ

【事例 10：イヤホン実験などの体験学習が生徒たちに強い印象】

1. 開催日：2019年5月30日（木）12:50～15:25（155分）
2. 主催：山形県立長井工業高等学校 全校生徒約260名
3. 実施者：マツキドライビングスクール長井校・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：長井工業高等学校 柔道場・剣道場・駐輪場前
5. テーマ：自転車の交通ルール
6. 内容：①法規学習
 ②グループ・ディスカッション
 ③体験学習（イヤホン使用運転の危険性）
 ④実験見学（交差点・巻き込み事故の危険性）
7. 準備物：法規学習：法規学習用テキスト
 グループ・ディスカッション：ディスカッション用イラスト・ワークシート
 体験学習：乗用車、自転車、イヤホン、音楽プレーヤー、拡声器など
8. カリキュラム：

時間		1年	2年	3年
11:5～12:50	60	準備		
12:5～13:00	10	開会式		
13:0～13:05	5	移動		
13:0～13:45	40	法規学習【柔道場】	グループ・ ディスカッション 【剣道場】	体験学習【駐輪場前】 ①交差点の危険 ②死角 ③イヤホン実験
13:4～13:55	10	移動		
13:5～14:35	40	グループ・ ディスカッション 【剣道場】	体験学習【駐輪場前】 ①交差点の危険 ②死角 ③イヤホン実験	法規学習【柔道場】
14:3～14:45	10	移動		
14:4～15:25	40	体験学習【駐輪場前】 ①交差点の危険 ②死角 ③イヤホン実験	法規学習【柔道場】	グループ・ ディスカッション 【剣道場】
15:2～15:45	20	撤収		
15:4～16:30	45	情報交換会		

9. 生徒の感想など：

- イヤホン実験や自動車の死角体験などの体験学習は多くの生徒に強い印象を与えた。講習後に実施したアンケートでは、「イヤホンをつけると車の近づく音がまったく聞こえなくてびっくりした」「音楽を聴きながらだと、背後からの車に気づかずに事故になってしまう」「内輪差やイヤホンの体験ができてよかった」などのコメントが寄せられた。

- アンケートで今後の自転車運転で気をつけたいことがあるか聞いたところ、ほぼすべての生徒が自転車の交通ルールを守って安全運転をしていきたいと述べていた。なかには、「これまでケータイを操作していた。今後はやめたい」「イヤホンを使うのをやめようと思う」と、普段の自分の行動がルール違反であったことを正直に反省し、今後は改めると述べる生徒もいた。
- 「交差点の危険」「自転車の死角」を具体的に体験したことで、車の運転者の視点や車の特性などの知識を今後の自身の運転行動に役立てたいとする積極的な声もあった。「内輪差がとても危ないと感じた。大型トラックが曲がった後に曲がるようにしたい」「左側を通行したほうが車の運転手に見えやすいことがわかった」「ドライバーから見づらい場所がわかった。これからは常に周りに気を配って運転していく」などの意見があった。



交差点における巻き込み事故の危険性を確認



自動車の死角体験



イヤホン使用運転の危険性を体験

【事例 11：法規学習で加害責任の重さなど学ぶ】

1. 開催日：2019年6月7日（金）8:50～10:40（110分）
2. 主催：山形県立鶴岡中央高等学校 377名（1年生174名、2年生203名）
3. 実施者：鶴岡自動車学園・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：鶴岡中央高等学校 芸術ホール、駐車場
5. テーマ：BICYCLE RULES
6. 内容：①法規学習
②体験学習（イヤホン使用運転の危険性、自動車の死角体験、狭路走行）
7. 準備物：法規学習：法規学習用テキスト
体験学習：乗用車、自転車、イヤホン、音楽プレイヤー、拡声器など
8. カリキュラム：

時間		1年生（174名）			2年生（203名）		
		1班60名	2班59名	3班55名	1班64名	2班60名	3班79名
7:50～8:50	60	準備					
8:50～8:55	5	開会式					
8:55～9:00	5	移動					
9:00～9:40	40	法規学習			体験A	体験B	体験C
					体験B	体験C	体験A
					体験C	体験A	体験B
9:40～9:50	10	移動					
9:50～10:30	40	体験A	体験B	体験C	法規学習		
		体験B	体験C	体験A			
		体験C	体験A	体験B			
10:30～10:40	10	閉会（警察署 講評）					
10:40～11:00	20	撤収					
11:00～11:45	45	情報交換会					

9. 生徒の感想など：

- 法規学習では、「事故を起こしたら（義務、責任、将来）」の内容が強く印象に残ったという生徒が多かった。高額な賠償金に驚いたという感想だけでなく、「交通事故で将来の夢が壊れてしまわないように、事故を起こした場合の対応をしっかりと覚えたい」「加害者になると将来に影響が出るので、事故を起こさないように運転したい」など、自転車運転者としての責任を強く自覚するコメントがあった。

- 多くの生徒たちの印象に強く残った体験学習。実際に自動車の死角を体験してみて、将来車を運転するようになる自分の姿を想像して回答する生徒もいた。「車の運転はまだ先だが、今日学んだことを忘れず、運転に気をつけたいと思った」「将来、車を運転することもあると思うが、自転車の段階から交通ルールを守りたいと思った」など、交通ルールを守ることが重要であるという意味では、現在の自転車運転も将来の自動車運転も変わらないことを意識する生徒がいた。



イヤホン使用運転の危険性を体験



多くの車両を用意して、自動車の死角を体験

自転車に乗って狭路走行、
自転車をコントロールする難しさを学ぶ



【事例 12：映像から普段の自分の行動を振り返ったグループ・ディスカッション】

1. 開催日：①2019年6月13日（木）14:25～15:15（50分間）
②2019年7月18日（木）13:25～15:15（110分）
2. 主催：山形県立酒田光陵高等学校 ①全学年 997名（約40名×8クラス×3学年）
②1年生 312名（約40名×8クラス）
3. 実施者：出羽自動車教習所・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：酒田光陵高等学校 体育館・視聴覚室・中庭など
5. テーマ：自転車の正しい通行方法
6. 内容：①法規学習
②グループ・ディスカッション
③体験学習（イヤホン使用運転の危険性）
④実験見学（駐停車車両の側方通行時の危険性）
7. 準備物：法規学習：法規学習用テキスト
グループ・ディスカッション：ディスカッション用サンプル映像・ワークシート
体験学習：乗用車、イヤホン、音楽プレーヤー、拡声器、パイロン
実験見学：乗用車、自転車、拡声器
8. カリキュラム：

①6月13日（木）

時間	内容	備考
13:25～14:15	0:50 準備	
14:15～14:25	0:10 生徒入場	
14:25～15:15	0:50 法規学習	
15:15～15:25	0:10 撤収	

②7月18日（木）

時間	クラス	クラス	クラス	クラス	クラス	クラス	クラス	クラス
12:25～13:25	1:00	準備						
13:25～14:15	0:50	グループ・ディスカッション			体験		実験見学	
					実験見学		体験	
14:15～14:25	0:10	移動・休憩						
14:25～15:15	0:50	体験		実験見学		グループ・ディスカッション		
		実験見学		体験				
15:15～15:30	0:15	撤収						
15:30～16:15	0:45	情報交換会						

9. 生徒の感想など：

- グループ・ディスカッションでは、一時停止をしないなど多くの人が自転車の違反を繰り返す「定点観測ビデオ」のサンプル映像に驚いたという生徒が多かった。「動画でほぼ全員が一時停止を守らず走行していた。当たり前のように多くの人が違反していた。自分も他人から見れば危険な行為をしているかもしれないと心配になった」「一時停止の標識を無視する人が多かった。周りの人がやっても自分は守れるようになりたいと思った」など、生徒たちは普段の自分の運転行動を振り返る姿勢でディスカッションに臨んだ。また、「グループで話し合ったり、個人で考えて目標を作ったりしたところが楽しかった」と、グループ・ディスカッションの手法そのものに興味をもつ生徒もいた。
- 「駐停車車両の側方通行時の危険性」の体験学習では、駐停車車両のサイドミラーを見て、中に運転手が乗っているかどうか確認するなど、危険を未然に防ぐ具体的な「テクニック」が紹介された。「車の横を通るタイミングで人が出てくることは考えたことがなかった。車の陰や車の中から人がでてこないか確認することが大事だとわかった」「小さい子どもが車の陰にいると見えなくなって危険。子どもが近くにいたらスピードを抑えて通行したい」など、生徒たちは危険を事前に察知することの重要性を学んだ。



全校生徒を対象に体育館で実施された法規学習

1 年生を対象に実施された体験学習と実地見学



【事例 13：自転車安全利用五則を初めて知る生徒も】

1. 開催日：2019年6月14日（金）9:00～10:10（70分間）
2. 主催：山形県立新庄神室産業高等学校 1年生 113名（30名×4クラス）
3. 実施者：新庄第一自動車学校・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：新庄神室産業高等学校 視聴覚室・ピロティエ
5. テーマ：自転車の交通ルール
6. 内容：①法規学習
②体験学習（イヤホン使用運転の危険性、自動車の死角）
7. 準備物：法規学習：法規学習用テキスト
体験学習：乗用車、自転車、イヤホン、音楽プレイヤー、拡声器など
8. カリキュラム：

時間		1・2組（約60名）	3・4組（約60名）
8:00～8:55	55	準備	
8:55～9:00	5	開会式	
9:00～9:30	30	法規学習	体験学習（イヤホン・自動車死角）
9:30～9:40	10	移動	
9:40～10:10	30	体験学習（イヤホン・自動車死角）	法規学習
10:10～10:30	20	撤収	
10:30～11:15	45	情報交換会	

9. 生徒の感想など：

- 自転車安全利用五則を知らない生徒が少なくなかった。「ルールが5つあることに驚いた」「自転車には左側通行などのはっきりした区別があったことを知った」と、正しい自転車の交通ルールを初めて学んだと述べた生徒もいた。
- 「イヤホン使用運転」は、多くの生徒にとって、普段自分自身や友人がしている身近な問題だった。「イヤホンをつけながら歩いたり、自転車に乗ったりすることはやめようと思った。ほかの人がしていたら注意したい」「イヤホンなどをしているのとしらないのでは、思った以上に違ってびっくりした。今後はイヤホンをしないで走る」。イヤホン使用運転の危険性を学ぶ体験は、生徒たちに新鮮な学びをもたらした。
- 「自動車の死角」の学習では、普段乗らない自動車の運転席からの視界を体験した。「車にのってみて死角があることを理解した。運転手が自分のことを認識しているかを意識して自転車に乗りたい」「車の運転手があぶないと思うような自転車の運転は絶対やらないようにしたい」「車には死角があるので、ルールを守り、安全に自転車に乗りたい」など、体験したことを普段の自転車の運転に役立てたいとする声が多かった。



地元警察署の担当者による開会式の挨拶



自動車の死角体験



イヤホン使用運転の危険性を体験

【事例 14：法規学習とグループ・ディスカッションで交通ルールの重要性を認識】

1. 開催日：2019年6月19日（水）13:30～15:20（110分）
2. 主催：山形県立上山明新館高等学校 全校生徒約770名
3. 実施者：のーきれん自動車学校・日本交通安全教育普及協会
4. 会場：上山明新館高等学校 体育館
5. テーマ：自転車の交通ルール
6. 内容：①法規学習
②グループ・ディスカッション
7. 準備物：法規学習：法規学習用テキスト
グループ・ディスカッション：ディスカッション用イラスト・ワークシート
8. カリキュラム：

時間		内容	備考
12:30～13:20	0:50	準備	
13:20～13:30	0:10	生徒入場	
13:30～14:20	0:50	法規学習	
14:20～14:30	0:10	休憩	
14:30～15:20	0:50	グループ・ディスカッション	
15:20～15:30	0:10	撤収	
15:30～16:20	0:50	情報交換会	

9. 生徒の感想など：

- 上山明新館高等学校では、体育館に全校生徒770名を集め、法規学習とグループ・ディスカッションを実施した。講習後のアンケートでは、法規学習で印象に残ったこととして、「自転車事故が、死亡事故につながってしまうことがある」「高校生にも自転車事故が頻繁に起こっていること。毎日発生していることや全体の30%を占めていることを知った」「ルールや意識の違いで、防げる事故があるということ。私たちも一瞬にして加害者になり得るということ」「ちょっとした違反が大きな事故につながり、加害者にも被害者にもなること、人生が狂ってしまうこと」などが挙げられた。
- また、今後の自転車運転で気をつけたいこととしては、「車がいることが確認できないT字路が多数あるので気を付けたい」「事故を起こすと、自分の将来・夢に大きくかわる」「自転車の並進は、運転者側にとって、非常に迷惑な行為であること知った」「軽車両を運転しているという意識をもっていきたい」などのコメントが寄せられた。
- アンケートを集計した生徒指導課教諭は、「動画によって、事故発生の現実と運転者目線からの状況を知ることができた。加害者には多額の賠償金や社会的制裁があることを知り、生徒たちには、並進・一時不停止・イヤホン・スマホは禁止といった交通ルールを守ろうという意識が芽生えたと思う」と評価した。



体育館で全校生徒を集めて実施された法規学習



引き続き体育館でグループ・ディスカッション
に臨む生徒たち